



TOHOKU
UNIVERSITY

IEHE Report 62

Institute for Excellence in Higher Education, Tohoku University

東北大学 高度教養教育・学生支援機構 高度教養教育諮問会議報告書 2015



東北大学高度教養教育・学生支援機構

東北大学高度教養教育・学生支援機構
高度教養教育諮問会議 報告書

目 次

まえがき	花輪 公雄（高度教養教育・学生支援機構長）	1
委員名簿		3
機構長諮問事項説明		5
諮問事項答申		13
議事録		
各委員の意見書		27
審議記録		43
あとがき	羽田 貴史（高度教養教育・学生支援機構副機構長）	85

ま え が き

東北大学は 2014 年 4 月に、それまでの高等教育開発推進センター、国際交流センター、国際教育院、グローバルラーニングセンター、教養教育院、高度イノベーション博士人財育成センターの教育組織を統合し、新たに高度教養教育・学生支援機構を設置した。本学は本機構を、高度教養教育、学生支援に関する調査研究、企画、提言、実施を一体的に行い、本学の教育を質的向上に寄与するための学内共同教育研究施設と位置づけている。

本機構は、高大接続と入試、全学教育の開発と推進、高等教育国際化の推進、学生相談と学生支援、保健管理と健康指導、高等教育の研究と開発を行い、これらの成果を評価分析し、質的向上を図る各種の専門性開発活動を行う総合的な役割を果たすことが使命である。また、高等教育のモデル構築の核心は、卓越性と多様性の追求であり、教育における卓越性の柱として、高度教養教育の開発と提供、多様性の柱として多様な学生のニーズに応える学生支援の開発と実施も行うこととしている。このような観点から、本機構は国内外を見ても他に例のない革新的でチャレンジングな組織ではないかと自負している。

さて、本機構には、「機構長の諮問に応じて本機構の組織と運営について協議し、並びに機構長に対して助言及び提言を行うため、高度教養教育諮問会議を置く」こととなっている（機構規定第 12 条）。委員は諮問会議内規により、任期は 2 年で、20 名以内とし、本学の学生、外国人学生、保護者、企業や地域、そして高等学校の関係者から選ぶことになっている。

機構発足後、1 年半を経過した 2015 年 9 月 30 日に第 1 回の諮問会議を開催した。委員には様々な立場から 11 名の方々に就任していただいた。そして、第 1 回目の諮問事項として、「東北大学でどのような学生を育てて欲しいか一期待」と「教養教育として何を求めるか」の 2 点をお願いした。現役の学生にとって、特に最初の項目は答えにくいものだったかもしれない。会議では、私たちへの質問も含めて活発にそして熱心に意見を交換して下さった。大変お忙しい中、諮問会議委員として参加して下さいました委員の方々に深く感謝したい。とりわけ議長を務めて下さり、さらに諮問の取りまとめをして下さった仙台二華高等学校校長倉光恭三先生には厚く御礼申し上げる。頂いた諮問内容は今後機構内で議論し、その実現に向けて最大限努力していきたいと考えている。

本冊子は、この第 1 回高度教養教育諮問会議の議事の内容を報告するとともに、後日、諮問していただいた報告書を収めたものである。本機構がその使命の達成に向けてますます発展するためにもこのような形で公表し、私たちの今後の活動に向けた決意表明とした。本冊子が手に取られた皆様方にもなにがしかの参考になれば幸いである。

2016 年 1 月

東北大学高度教養教育・学生支援機構
機構長 花輪 公雄

高度教養教育・学生支援機構高度教養教育諮問会議

日時：平成27年 9月29日（火） 13：30～16：30

場所：教育・学生総合支援センター大会議室

諮問事項： ①東北大学でどのような学生を育ててほしいかー期待
②教養教育として何を求めるか

資料等

- 資料1 委員名簿
- 資料2 座席表
- 資料3 高度教養教育諮問会議諮問事項意見書
- 資料4 東北大学高度教養教育・学生支援機構規程
- 資料5 東北大学高度教養教育・学生支援機構高度教養教育諮問会議内規
- 資料6 東北大学高度教養教育・学生氏機構の設立と展望
- 資料7 東北大学高度教養教育・学生支援機構リーフレット

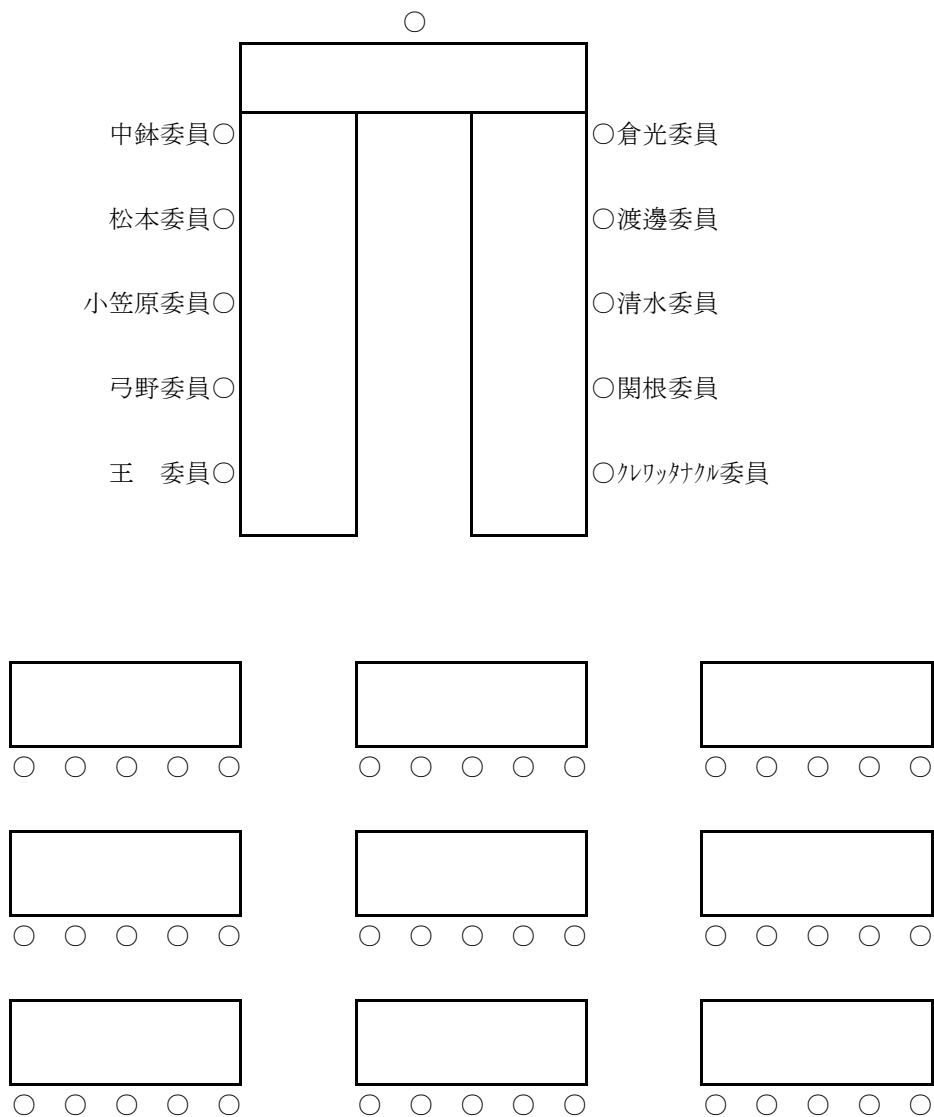
日 程

- 13：30～ 開会の挨拶・趣旨説明
- 13：50～ 委員の紹介
- 13：55～ 議長の選出
- 14：00～ 意見発表（@5分）
- 15：10～ 休憩（10分）
- 15：20～ 質疑応答
- 16：20～ 纏めの言葉（機構長）
- 16：30 終了

委員名簿

	委員名	所 属
1	中 鉢 良 治	産業技術総合研究所理事長
2	松 本 美 奈	読売新聞東京本社 専門委員
3	高 橋 仁	宮城県教育長
4	小笠原 朋 之	宮城県高等学校PTA連合会事務局長
5	渡 邊 幸 雄	仙台第二高等学校 校長
6	倉 光 恭 三	仙台二華中学校・仙台二華高等学校 校長
7	清 水 翔 太	大学院学生（文学研究科）DC1年
8	弓 野 沙 織	大学院学生（工学研究科）DC3年
9	関 根 綾	大学院学生（農学研究科）MC1年
10	王 珊 (オウ サン)	外国人学生（経済学研究科）DC2年
11	SIRINDA KHUREWATTANAKUL (シリダ クレワッタナクル)	外国人学生（工学研究科）MC1年

高度教養教育諮問会議座席表



ドア

ドア

機構長諮問事項説明



東北大学 高度教養教育・学生支援機構
諮問会議
2015年9月29日(火), 13:30-16:30
学生総合支援センター, 4階, 大会議室

東北大学 高度教養教育・学生支援機構の 設立と展望

The Institute for Excellence in Higher Education (IEHE)
and its Future Perspective

Kimio Hanawa

Director of IEHE / Executive Vice President for Education



高度教養教育・学生支援機構 機構長 / 理事(教育・学生支援・教育国際交流)
花輪 公雄

1. 現状認識：閉塞する現代社会と人材育成 Competencies Required in Modern Society



解決すべき多くのグローバル・イシュー

Global Issues We Face Today

- 経済のグローバル化…
- 資源・エネルギーの枯渇への懸念…
- 地球温暖化・海洋酸性化・海面上昇・極端気象の頻発
- 食糧・水の供給の不安定化…
- 不安定な政情…

日本社会のかかえる諸問題

Unsolved Issues in Japan

- 急激な少子化・高齢化の進行
- 地域コミュニティの衰退・破壊
- 新興国の台頭による競争激化
- 財政状況の悪化
- 東日本大震災の発生

高等教育を取り巻く課題

Challenges Facing Higher Education

- 「答えのない問題」について最善解を導くための知識・能力の鍛錬
- 学生の学修時間の確保・増加
- 学習成果の可視化
- 教育課程の体系化(学士課程教育概念の定着、体系的大学院教育)
- 組織的教育の確立
- 外国人留学生受入れ数の低迷、海外留学生数の減少
- 高等学校教育と高等教育の接続・連携
(第2期教育振興基本計画、教育再生実行会議第三次提言抜粋)

< 今、大学に求められている育成すべき人材像 >

Human Resource Development in Higher Education

世界でリーダーシップを取り活躍できるグローバル人材
閉塞した状況を破り新しい価値を創造するイノベーション人材
(産学協働人材育成円卓会議, 2012年5月)

2. 東北大学の教育‘戦略’：グローバルビジョン Education Strategy of Tohoku University



里見ビジョン Vision 1 (教育に関するビジョン)

「学生が国際社会で力強く活躍できる人材へと成長していく場を創出します。」
Create a place where students can grow into individuals capable of flourishing in the international community

【重点戦略①】グローバルリーダーを育成するための教養教育の充実を核とする教育改革

〔主要施策〕

- 現代的課題に挑戦する先端的で創造的な高度教養教育の確立・展開
- 創造的探究心と多元的・相対的な思考力及び多様な価値観を育む専門教育と教養教育の有機的連携
- 学生の学ぶ意欲を刺激する、国際通用性の高い教育システムの開発
- 全学的教育・学生支援体制の戦略的再編

【重点戦略②】グローバルな修学環境の整備

〔主要施策〕

- 外国人留学生の戦略的受入れと修学環境の整備
- 本学学生の海外留学と国際体験の促進
- 異文化の理解と実践的なコミュニケーション能力の養成

【重点戦略③】学生支援の充実強化

〔主要施策〕

- 学生への経済的支援制度の再構築・拡充と学生寄宿舎の整備・充実
- ハラスメント対策の徹底とメンタルケアの充実
- 進学・就職支援の充実・強化
- 課外活動支援の拡充

これらの目的を達成するために、教育改革と組織再編を実施。

新組織には、拡大した機能を果たすため、新たな人員の投入も含めた投資が必要。

3

3. 東北大学が育てるグローバルリーダーが持つべき 6つのキ・コンピテンシー

Six Key Competencies for Global Leader Educated in Tohoku University



<6つのキ・コンピテンシー>

Six Key Competencies

- ① 専門力
The ability to have a deep understanding of academic disciplines
専門とする学術分野を深く理解できる力
- ② 鳥瞰力
The ability to judge from a bird's eye view
より幅広い多面的な視点から物事を見ることができ、多様な尺度で判断できる力
- ③ コミュニケーション力
The ability to communicate with others
日本人や外国人を問わず他者と意思疎通を図ることができる語学力・プレゼンテーション力・ライティング力
- ④ 問題発見・解決力
The ability to find problems and resolve them
多面的思考により問題の所在を突き止めて、問題解決に向けて果敢に挑戦し、新しい状況や価値を創造できる力
- ⑤ 異文化・国際理解力
The ability to build an identity as Japanese and respect other countries' culture and history
日本の歴史と文化を理解し日本人としてのアイデンティティを持つとともに、他の国や地域の歴史と文化を理解し、尊重する力
- ⑥ リーダーシップ力
The ability to cooperate with others and exercise leadership
他者との深いコミュニケーションをもとに協働しつつ、積極的にリーダーとして課題を解決・克服していく力

現在の大学教育で、これら6つのキ・コンピテンシーを十分身につけさせることができるか？

現状分析

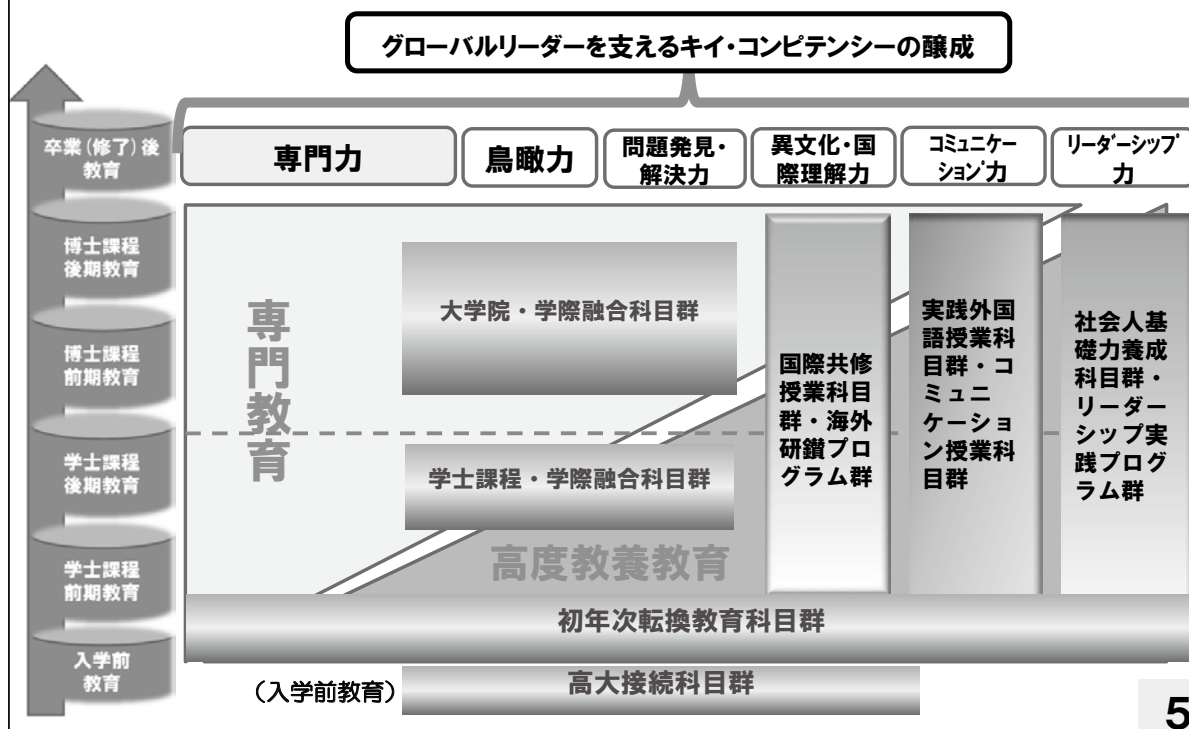
○現在の大学教育の問題点は？
○国内外の教育改革の動向は？
○本学のカリキュラムや教育システムの分析をすると？ (割愛)

結論

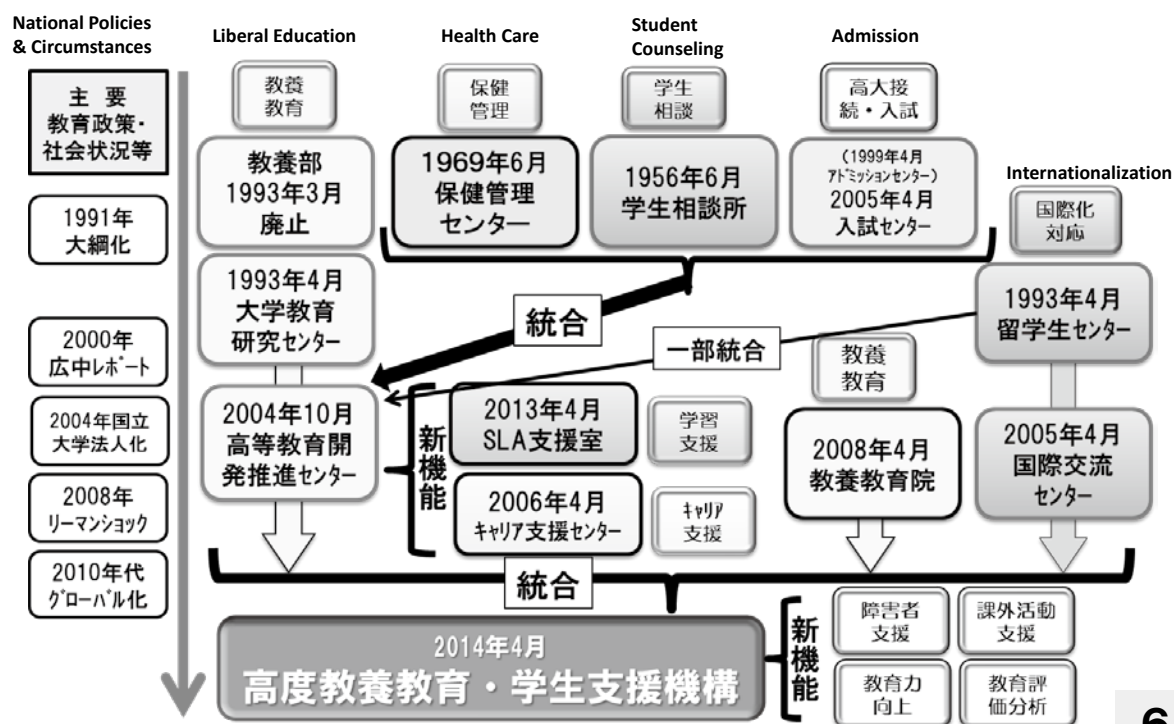
○教育改革の必要性
・高度教養教育の導入
・高度教養教育・学生支援機構 (2014年4月設置済)

4

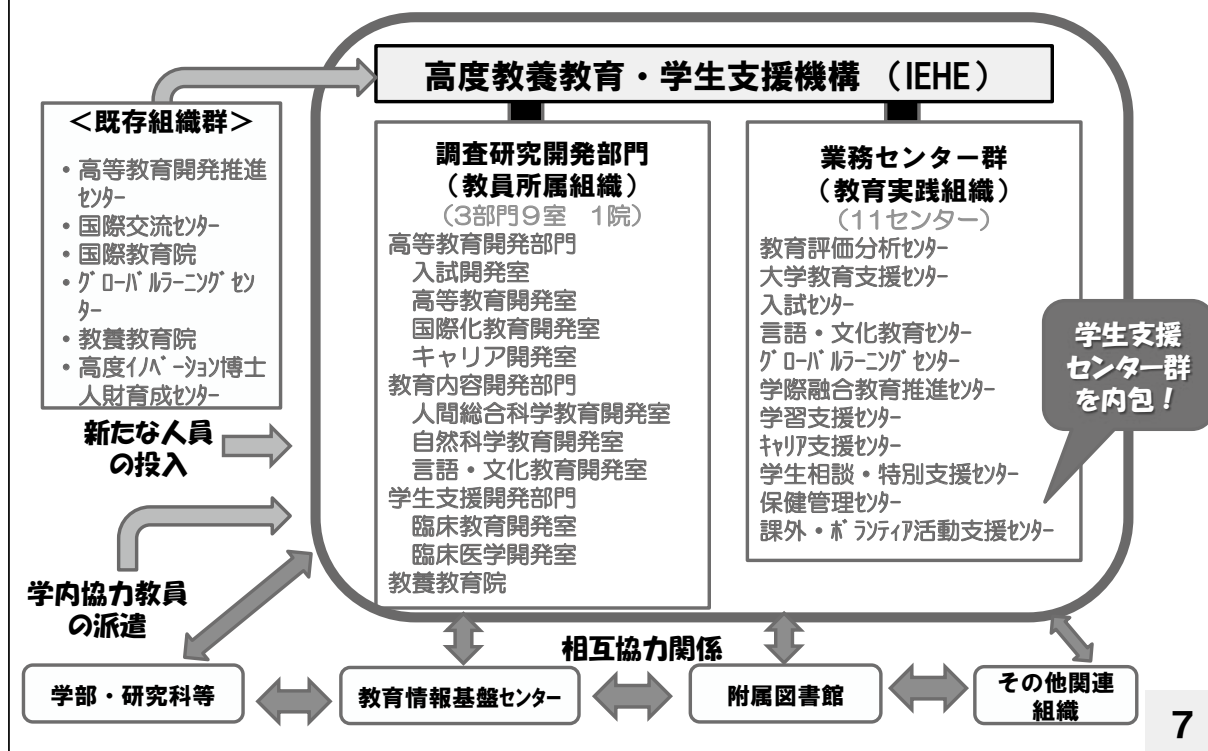
TOHOKU



TOHOKU
UNIVERSITY

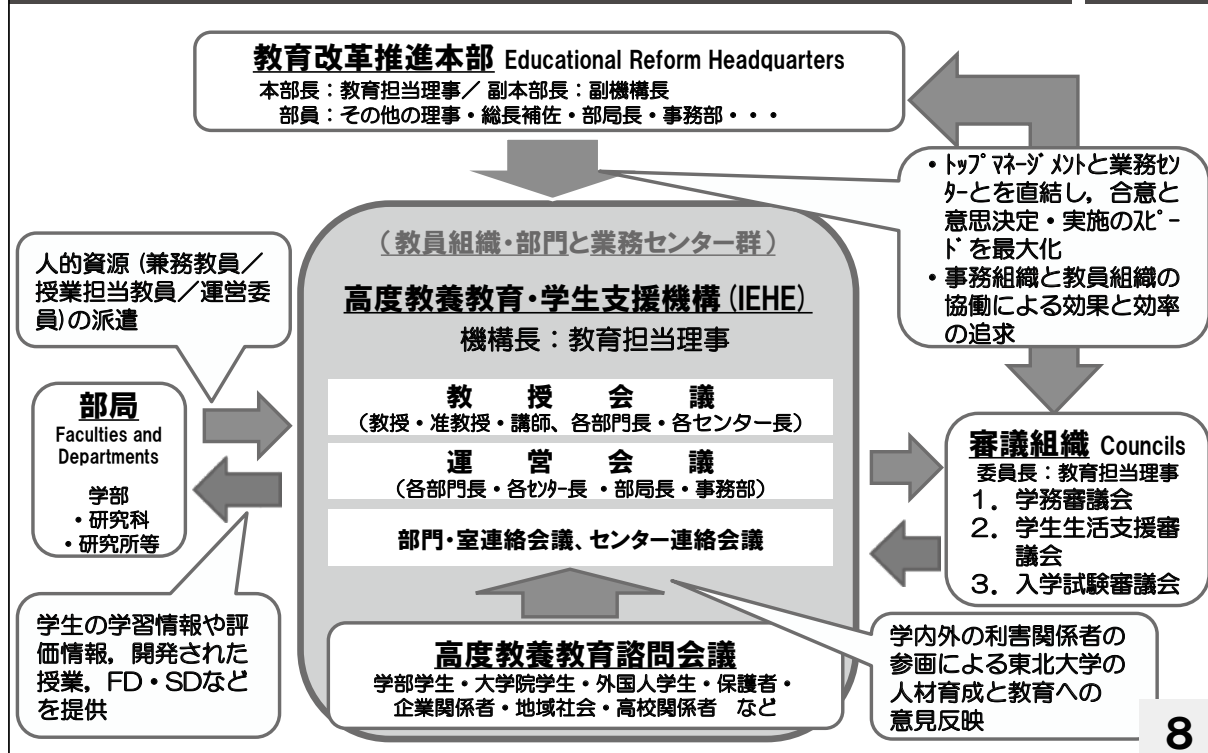


6. 高度教養教育・学生支援機構の組織概要 Outline of Institute for Excellence in Higher Education



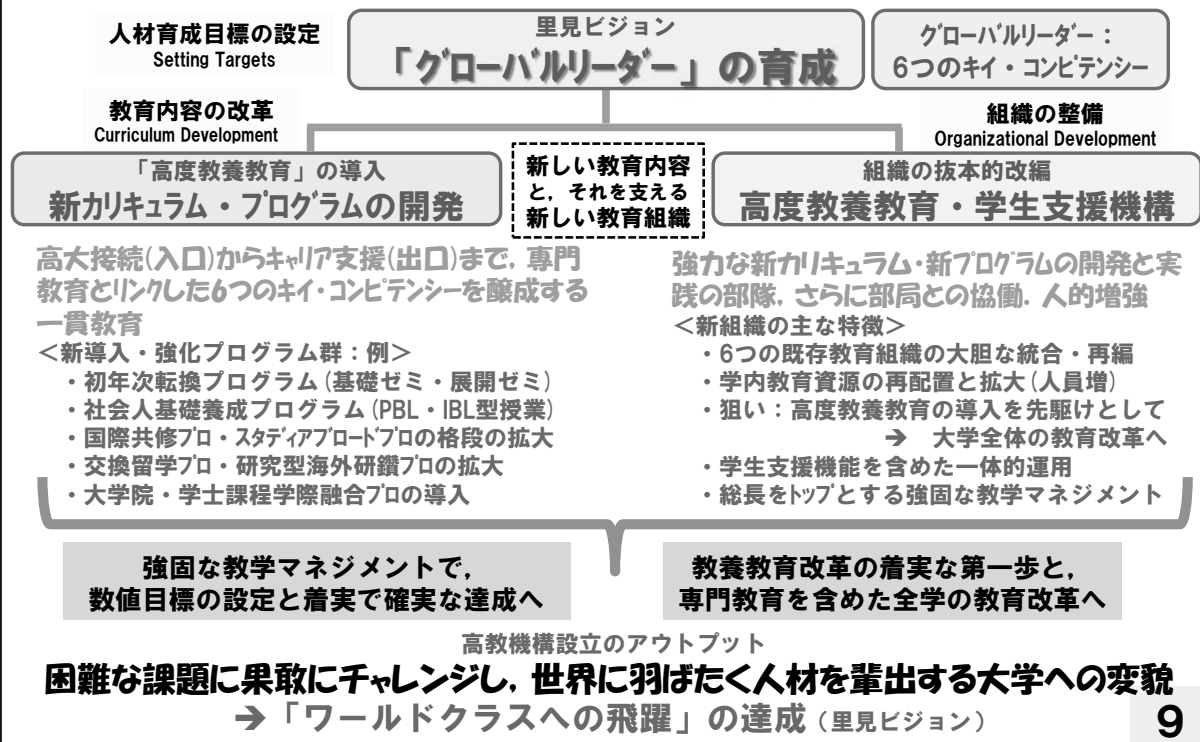
7

7. 全学的教育・学習マネジメント体制の構築 Constructing Cross-departmental Educational Management



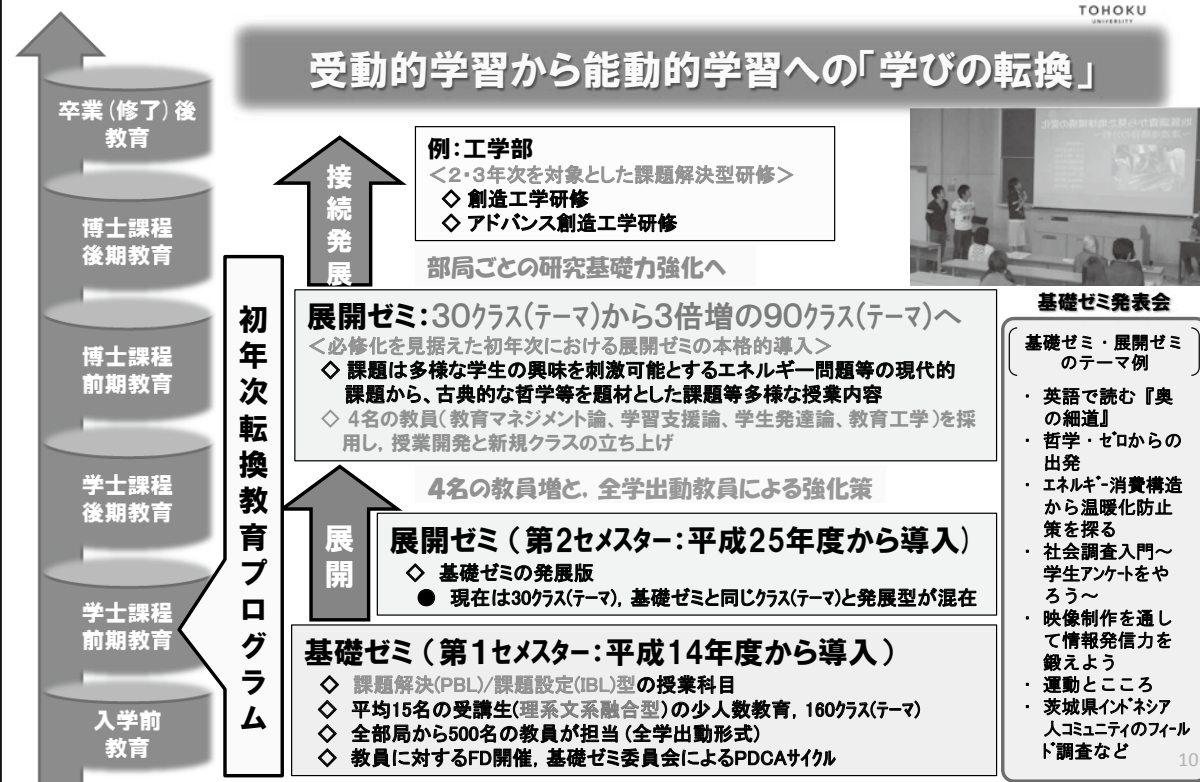
8

8. 新機構の設立と展望：東北大学の教育改革に向けた第一歩 Creating a New Organization: The First Step for Educational Innovation



9

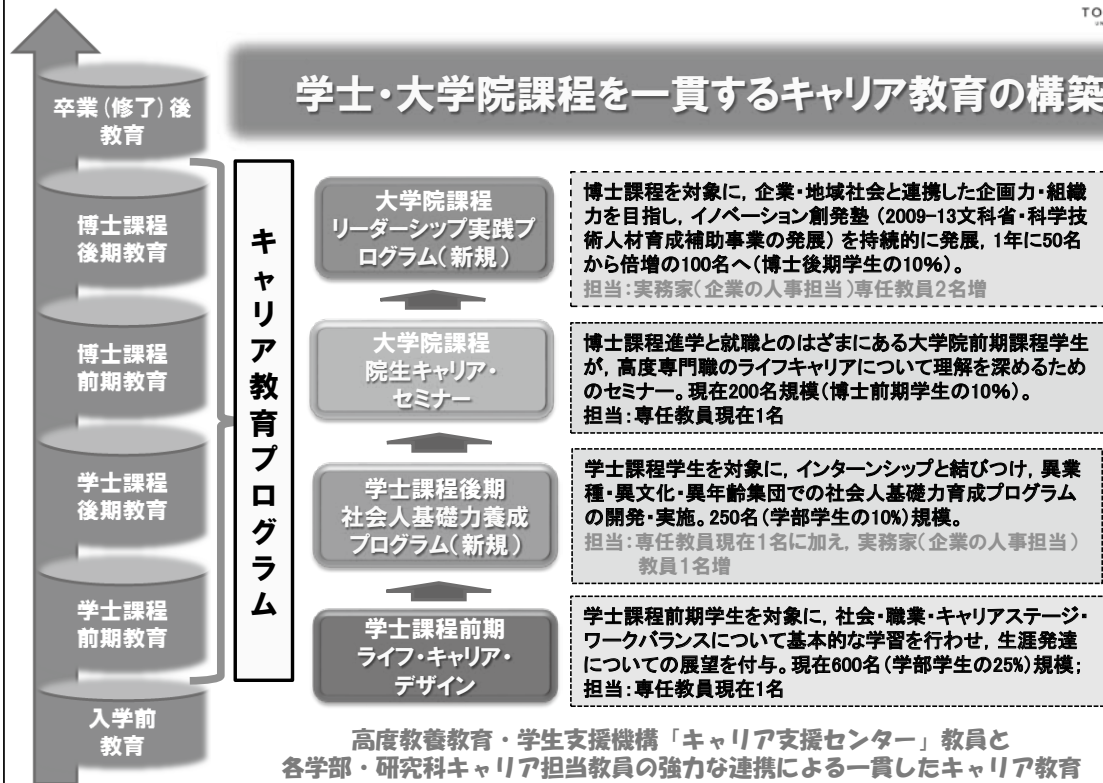
参考：新たに開発・強化するプログラム① —初年次転換教育プログラム(基礎ゼミと展開ゼミ)—



参考：新たに開発・強化するプログラム ②
—社会人基礎力養成プログラム・リーダーシップ実践プログラム—



学士・大学院課程を一貫するキャリア教育の構築

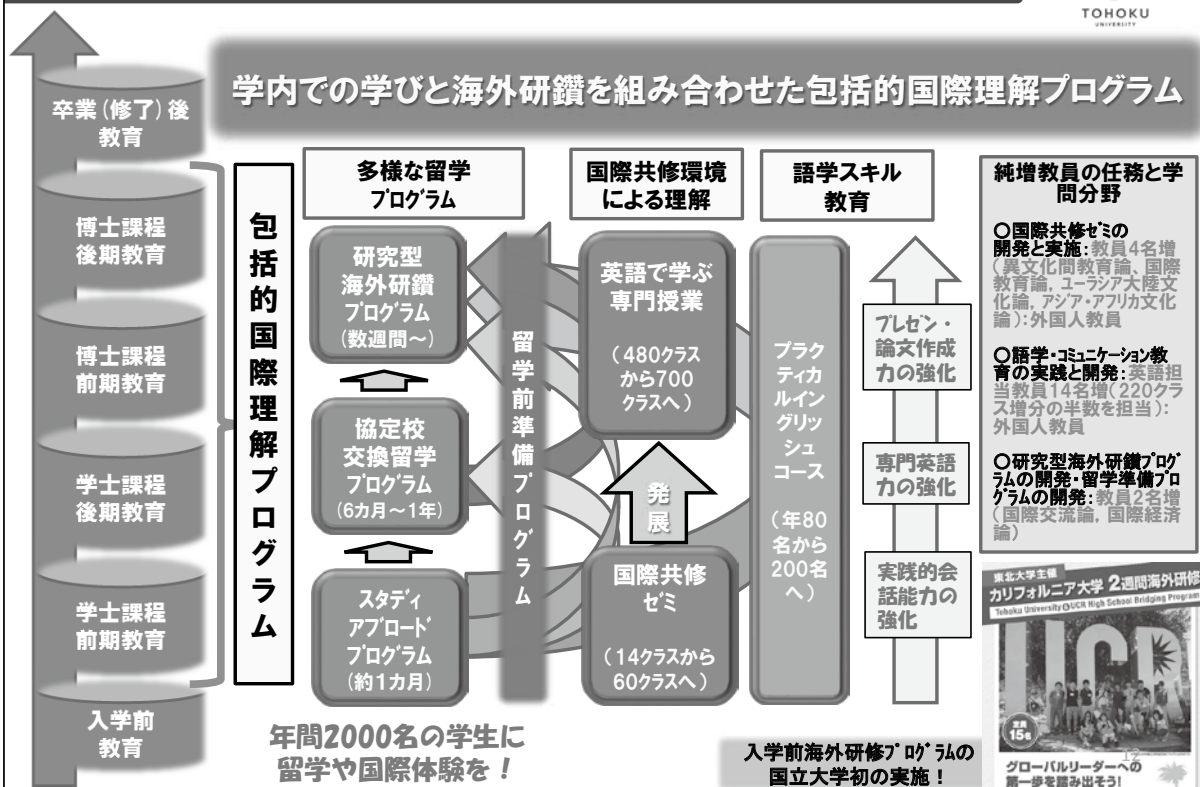


11

参考：新たに開発・強化するプログラム ③
—国際共修プログラム・研究型海外研鑽プログラム・協定校交換留学プログラム—



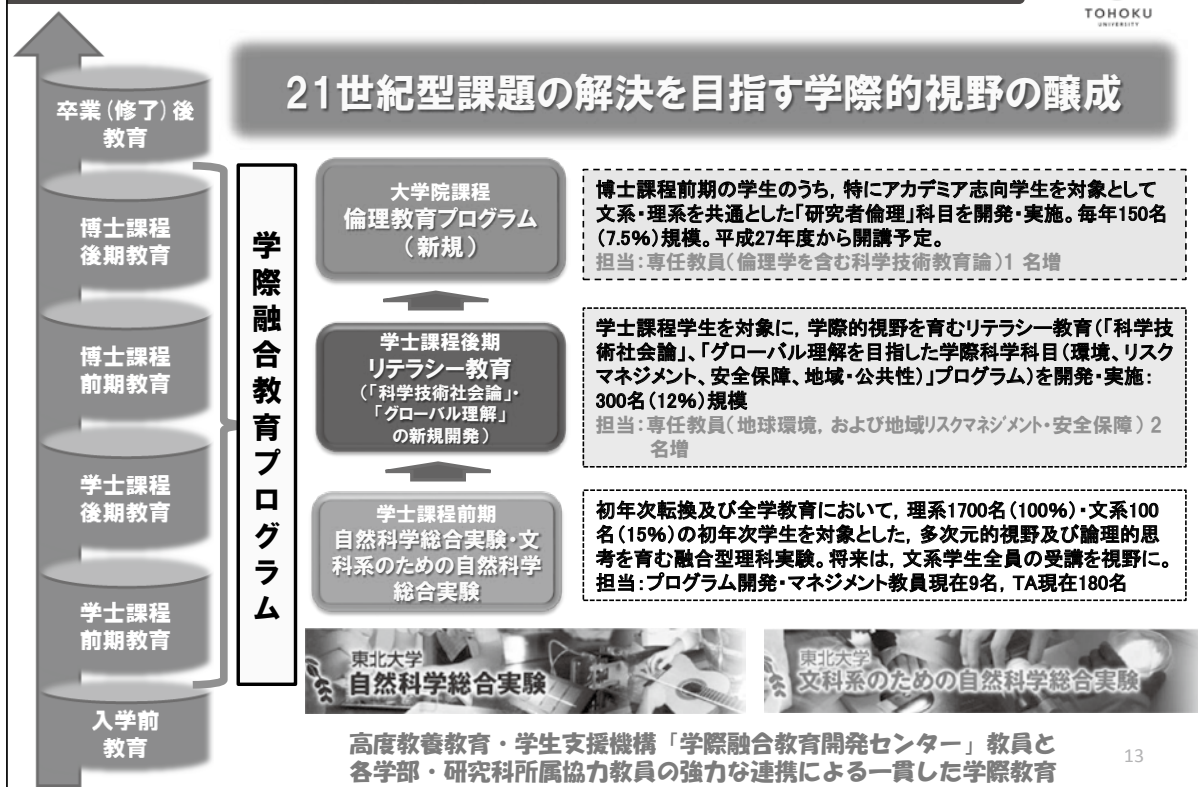
学内での学びと海外研鑽を組み合わせた包括的国際理解プログラム



参考：新たに開発・強化するプログラム ④ ー学際融合教育プログラムー



21世紀型課題の解決を目指す学際的視野の醸成



13

高度教養教育諮問会議

答 申

「東北大学高度教養教育・学生支援機構の設立と展望」

平成27年9月29日

東北大学高度教養教育・学生支援機構

諮問事項

1. 東北大学でどのような学生を育ててほしいか—期待
2. 教養教育として何を求めるか

はじめに

国内外の経済・政治情勢は、ますます複雑化・予測困難な時代にあつて、社会は一層のグローバル化が進み、これからの日本は、国際政治や外交、科学・文化、世界の安全・平和、さらに福祉・医療といった様々な分野で、その果たすべき役割と責任は大きく多様化している。我国はこれまで以上に、グローバルな視点に立って、価値観や言葉が異なる世界を相手に、適切な世界観をもって、的確に自己主張を行うことのできる人材の育成を推し進めていかねばならない。

教育再生実行会議等においても、大学教育・高等学校教育において、人材の質を飛躍的に高め、主体的に学ぶ習慣と幅広い教養を身につけたグローバル人材の育成が、我国の喫緊の課題として度々取り上げられるのは、日本の将来を担い、真に国際社会に通じるグローバルリーダーの育成に社会全体で取り組み、社会に輩出できる仕組み無くしては、日本の政治・経済の未来は大変厳しいものになるだろうとの政財界の強い危機感がその背景にある。

東北大学は「高度教養教育・学生支援機構の設立と展望」の中で、解決すべき多くのグローバル・イシュー、日本社会のかかえる諸問題、さらに高等教育を取り巻く課題の分析と検証を重ねて、教育に関する里見ビジョン「学生が国際社会で力強く活躍できる人材へと成長」、「大学のワールドクラスへの飛躍」を掲げた。さらにここでは東北大学が育てるグローバルリーダーの備えるべき6つのキイ・コンピテンシーを明らかにし、「高度教養教育」の導入と、「高度教養教育・学生支援機構」の新機構を再編整備し、新たな人的資源の投入を図り、教育改革に着手した。

さらに、教育改革の効果的・効率的な運営を図るため、学内外の利害関係者の参画による東北大学の目指す人材育成と教育への意見反映を目的とし、高度教養教育諮問会議が学内に設置され、第一回の諮問会議が平成27年9月29日に開催される運びとなった。

参加した委員の発言記録の詳細は、事務局作成の別紙会議議事録を参照願ひ、ここでは諮問項目である①「東北大学にどのような学生を育ててほしいか」、②「教養教育として何を求めるか」の二点に関し、各委員の発言の要点と提言をとりまとめている。

国立大学協会の会長校である東北大学には是非、国立大学の存在意義さらには東日本大震災の被災地復興を担う拠点校として、新しい日本の高等教育のありかたを示し、国際社会に通じるワールドクラスへの飛躍が求められている。

答 申

1. 東北大学でどのような学生を育ててほしいかー期待

(1) 豊かな人間性と高い技術力、研究開発能力を備えた人間育成を

東北大学はこれまでも多くの有為な人材を社会に輩出してきた。東北大学の建学の精神である「研究第一」、「門戸開放」、「実学尊重」の理念を貫き、高い技術力、優れた研究開発能力を身につけるとともに、豊かな人間性を育む大学教育が期待されている。

(2) 力強いリーダーシップとイノベーション力を身につけた人材を

ますますグローバル化が進展する国際社会において、力強いリーダーシップを発揮し、イノベーション力を身につけた人材を育ててほしい。価値観・思想・言語の異なる国際社会を相手に、適切な世界観を持って、堂々とわたり合い、国際間の競合する複雑な利害関係を調整し、新しい価値を創造することのできる人材である。

(3) 「骨太の人材」育成を

社会の期待に応えられる「骨太の人材」を育ててほしい。「真摯な姿勢で物事に対処し度量の大きな心豊かな若者」、「自ら主体的に行動し、社会に貢献し、世界をリードしうる人材」である。そのためには、東北大学のねらいとする高度教養教育を戦略的な視点から、着実に推進していかなければならない。

(4) コミュニケーション能力をしっかりと身に着けた社会人を

コミュニケーション能力をしっかりと身につけた社会人を育ててほしい。コミュニケーション＝言語能力と狭く捉えず、人間関係を構築するためのさまざまな能力を養う教育である。

(5) 次世代を育てる人材育成を

次世代をきちんと育てられる社会人を育ててほしい。次に続く世代に「社会」と「個人」との関係を伝え、その中でどう考え、行動することで、世界をより良くできるのかを考えることのできる人材である。その不可欠の要素は「構想力」と「実現力」である。現状を把握し、課題を抽出した上で、どの様な社会を目指すのか「構想」し、そこに向けての「戦略」を立て、「戦術」を練り、「戦力」をそろえる事ができる人材である。

(6) 国際的に活躍し地域のリーダーとなる人材育成を

国際的に活躍できる人材育成とともに地域のリーダーとなり「地方創生」に貢献できる人材を育ててほしい。東北地区にキャンパスを構える大学として、地域の再興、震災から

の復興を担う力強いリーダーを育ててほしい。地域が活気づくことは、ひいては日本全体の活力となり、国際的な競争力を高めることにも繋がる。

(7) 地球規模の視野を持つ地球市民の育成を

日本のことのみならず、今後の発展トレンドを把握し、地球規模の広い視野をもった「地球市民」を育ててほしい。地球市民（グローバルシティズン）の一人として、内向き思考からの脱却を図り、平和、環境、貧困、人権、異文化理解など地球規模の課題に関心を広げ、その課題解決に向けて、日々の生活の中で考え、身近なところから、自ら考え行動できる人材である。

2. 教養教育として何を求めるか

(1) 教養教育の価値を広く発信すること

教養教育が学生にとって何の役に立つのか、学内外にわかりやすくアピールする必要がある。たとえば、社会がグローバル化する中で、個人のアイデンティティーの探求につながる日本の文化、日本の歴史、日本の社会を自らの言葉で語ることのできるカリキュラムの開発など。視野を世界に広げ、日本人として何ができるかを考えられる人間になってほしい。

(2) 組織として責任ある教育を推進すること

最低でも、①新聞を毎日読み、②社会を客観的に論じ、③他者と意見をぶつけ合い、④力を合わせ、新しい知をつくり出し、④発信できるような人を育てる教育を行ってほしい。個々の授業を教員任せにせず、アドミッションポリシー、カリキュラムポリシー、ディプロマポリシーを明示した上で、大きな見取り図を描き、カリキュラム全体を大学が責任持って築き上げてほしい。

(3) 学ぶ意欲と探求心を発展させる教養教育を迫及すること

教養教育において、学生達の「自分たちも学びたい」、「学んだことを役立てたい」、「人の役に立ちたい」という思いを大切にしてほしい。学生達の知識の習得、活用、さらに知りたい、学びたいという探求心に繋げ、それがスパイラルのようにどんどん伸びていく力を養うことが教養教育の役割と考える。

(4) 主体的な学習の基盤となる学習方法の確立を支援すること

学び続ける姿勢、それを可能にする学習方法の確立を支援する教育を求めたい。

体験学習等により、様々な機会を捉えて「意識づけ」を図り、内発的な学習意欲とそれを支える基礎となる学問、すなわち、語学や専門教育の基盤となる部分をハードに鍛え、バランスよく育ててほしい。

(5) 学習支援の充実と学ぶ意識を刺激する教養教育の推進をすること

わかりやすい論文の作成能力やプレゼン能力向上を目的とした授業、実践的英会話能力の強化など、学習支援の充実を図り、学生の学ぶ意欲を刺激するような教養教育を実施してほしい。

(6) 倫理教育や異文化交流など高度な教養教育を実行すること

学部のできるだけ早い段階で、「生命倫理」や「研究者倫理」等の科学技術教育の基礎を学び、自らの考えを確立することのできる教養教育を行ってほしい。国際基準の英語力、

学内での外国人学生とのオープンな異文化交流など、世界に通じるグローバルキャンパスの実現を目指し、高度な教養教育を着実に実行してほしい。

(7) スーパー・グローバル・ハイスクールとの連携を進めること

全国の先進的な課題研究に取り組むスーパー・グローバル・ハイスクール（SGH）校との「連携」を図り、SGH 校の 3 年間の優れた課題研究成果を、東北大学の高度教養教育プログラムに「接続」させ、グローバルな修学環境においてより高度に発展・開花させる仕組みづくりを行ってほしい。

以下は、議長としてまとめた審議メモである。

1. 東北大学でどのような学生を育ててほしいか—期待

■ 発言の要点

企業関係者

(中鉢委員)

- ・企業は、高い技術力、優れた研究開発能力を有する人材を欲していることは確かであるが、同時に豊かな人間性を育む大学教育に期待している。
- ・大学で得た新しい技術や知識の単なる運び手ではなく、「将来大きく開花する人材」としてその将来性に期待がある。何が問題かに気づき、自らの頭で考え抜き、様々な試行錯誤を経て、解決に至る力を備えた人材である。そのためには、研究に対する目的意識を明確に持たせ、一緒に考え、正しい方向へ導き、成功体験を分かち合うことが重要である。
- ・大学教育にコミュニケーション能力の涵養を求める声が強い。コミュニケーション＝言語能力と狭く捉えず、人間関係を構築する様々な能力を養う教育をお願いしたい。
さらに主専攻に加えて副専攻を持つ事を提案したい。線でしかなかった専門知識が面の様な広がりを持ち、社会との接点もより多様なものになり得るだろう。

(松本委員)

- ・次世代をきちんと育てられる社会人を輩出してほしい。小、中学校、高校、大学の教育現場で教える教員にとどまらず、企業や団体、官公庁などあらゆる場面で、次に続く世代に「社会」と「個人」との関係を伝え、その中でどう考え、行動することが世界をより良くすることができるかを考えさせることのできる社会人の育成である。
- ・そうした人に不可欠の要素は「構想力」と「実現力」である。現状を把握し、課題を抽出した上で、どの様な社会を目指すのか「構想」し、そこに向けての「戦略」を立て、「戦術」を練り、「戦力」をそろえる事ができる人である。
- ・産業界や官公庁を取材する中で実感するのは、大学教育に対する根強い不信感だ。
「指示されたことしかない」、「知識はあるが、意見を尋ねると黙ってしまう」、「自分で考えて新しいものを創りだす発想力もガッツもない」、「社会観がない。幼い」。つまり実社会で働く大学卒、大学院修了の若者に対する不満がその根底にはある。大学の重要な使命の一つは学生を育てることである。社会の期待に応えられる人を育ててほしい。

宮城県高等学校 PTA 連合会

(小笠原委員)

本会の現会長、前会長から学ぶ事は、謙虚に社会の中で貢献している姿である。東北大学は「研究第一」、「門戸開放」、「実学尊重」の理念に基づく建学精神を貫き、これまで多くの有為な人材を世に輩出してきた。この建学の精神を東北大学の門をくぐり、学ぼうとする学生諸君、学んでいる学生諸君の体内に流れている血のように隅々まで浸透させ、そして一つ一つ学んだことを積み上げていく尊さと、粘り強く生き抜く力を体得し、進取の精神を発揮し、未来を創造できる人間となって、社会で活躍できる事を期待する。

高校関係者

(渡邊委員)

- ・一言で言えば、「骨太の人材」育成である。「真摯な姿勢で物事に対処し度量の大きな心豊かな若者」である。さらに「自ら主体的に行動し、社会に貢献し、世界をリードする人材」を育ててほしい。そのためには高度教養教育をしっかりやっていただき、力のある学生を育ててほしいし、特に最近理系に比べ、やや地味なイメージの文系学部にも、さらなる発信を期待する。世界を、日本を、東北をリードする人材を育ててほしい。
- ・東北大学に限らないが、コミュニケーション力等に課題のある学生も見られる。さらにバス車中や自転車走行においても一般常識・マナーの欠いた学生も少なくはない。

(倉光委員)

- ・異文化理解、国際理解力、外国人とのコミュニケーション能力などにおいて、国際水準の学生を育ててほしい。グローバルシティズンとしての意識を高め、地球市民の一人として、地球規模の環境問題、人権問題、貧困、教育、平和などに興味関心を広げ、まずローカルな活動から主体的・協働的に取り組むことのできる人材である。
- ・将来、世界を舞台に、価値観、思想、言語の異なるグローバル社会において、適切な世界観を持って、国際間で競合する複雑な関係者利害を調整し、グローバルな課題解決力を身につけることで、わが国や世界の平和と発展に貢献できる人材である。
- ・高校教育で「確かな学力」を身につけた生徒を、大学において国際水準へと引き上げ、グローバルな国際社会で、複雑・高度な課題解決力を発揮することのできる、国際社会に強い人材として社会に送り出してほしい。

学部学生・大学院学生

(清水委員)

自分の人生を幸福であると思える学生が育つことが大切である。

外部（内部？上？）からの要請に応じて、対外的なアピールに使える学生を東北大学は育てるべきであろう。東北大学の卒業生が、世界的な成功を収め、それが呼び水となり、さらに優秀な頭脳が大学に集まり、金回りもよくなり、全てがよくなるというプランは

非常に魅力的だ。 そのためにはその功績を内外にアピールする力がより重要となる。

(弓野委員)

- ・ 大学では社会のニーズに応えられる人材を輩出すべきと考えるので、まだ社会経験がない学生にこの質問をされても答えようがないというのが正直な感想。
- ・ 指導教官と企業関係者との会話から、最も印象に残ったのが、「論理的な文章を書く力がついていない若い社員が多く、大学教育で文章力を身につけさせてほしい」という意見であった。
- ・ 研究室の学部生、修士学生の論文を指導していても、論理的な文章を書く（書き込まなければならぬ情報を階層化し、取捨選択し、順序立てて記入するなど）ということが苦手な学生が多いと感じている。

(関根委員)

- ・ グローバル化する世界の中で、国際的に活躍できる人材の育成が必要であると共に、地域のリーダーとなり「地方創生」に関わっていく人材も必要である。地域の再興、震災からの復興を担う力強いリーダーを育てていく必要がある。
- ・ 東北にキャンパスを構える大学として、地域の再興、震災からの復興を担う力強いリーダーを育てていく必要がある。英語力、コミュニケーション力を身につけ、地域と世界を「繋ぐ」役割の人材育成が求められる。地域の活性化はひいては日本全体の力となり、国際的な競争力を高めることにも繋がるから。

外国人学生

(王委員)

- ・ グローバルな人材になるような学生を育ててほしい。その背景は、各分野での国際競争力が激化、企業の海外展開から日常生活までグローバル化の影響が浸透しているから。日本のことのみならず広い視野で今後の発展トレンドを把握でき、自ら考えて行動できる人材が求められている。
- ・ 東北大学生の能力は十分高いと認識しているが、自分自身の事にしか興味が無く、社会全体の問題や国際問題などに無関心な学生の割合も高い。授業やセミナーにおいても個人の見解が求められても見解がない。または、うまく述べられない現象をしばしば見る。これは、社会での競争上、極めて不利なことである。学生もわかっているが行動に移せないのは、グローバルな競争の厳しさを十分に認識していない、危機感がないからではないか。
- ・ 東北大生は、一般的にいつて英語力が不足している。幾つかの原因が考えられるが、国際標準の TOEFL や IELTS ではなく、ローカルな TOEIC や TOEFLITP など、相対的に採用されている基準が低いことにも起因しているのではないかと。また外国人留学生も

多数在籍しているのに、その機会を利用せず、実際に英語を使って会話するシーンが少ないようだ。

(クレワッタナクル委員)

- 企業や社会に出たら使える人間になる学生を育ててほしい。

そのためにも専門の講義では基礎的なことだけを行って、その理論をどうやって応用すればいいかの教育課程を充実させてほしい。また、学部の段階から倫理の講義などを増やし、倫理観を持った学生を育ててほしい。

- 日本人は外国の人にとって壁のようなものがあるとよく感じる。異文化理解のできる学生を育ててほしい。

2. 教養教育として何を求めるか

■ 発言の要点

企業関係者

(中鉢委員)

- ・教養教育に携わる先生には、18～20才という多感で、何にでも興味があり、何でも吸収できる若者の、その後の人生を左右する貴重な時期の教育を任されている。その後の人生に多大な影響を及ぼすことのできる特権を与えられているといっても過言ではない。是非「おもしろい」講義、「本物の」講義をお願いしたい。
- ・社会がグローバル化する中で、日本の文化、日本の歴史、日本の社会を語れる人間（個人のアイデンティティの探求）を育ててほしい。視野を世界に広げるとともに、日本人として何ができるかを考えられる人間になってほしい。それが己を助け、国を助ける事にも繋がる。

(松本委員)

- ・最低でも①新聞を毎日読み、②社会を客観的に論じ、③他者と意見をぶつけ合い、④力を合わせ、新しい知をつくり出し④発信できるような人を育てる教育を行なってほしい。個々の授業を教員任せにせず、アドミッションポリシー、カリキュラムポリシー、ディプロマポリシーを明示し、カリキュラム全体を大学が責任持って築き上げてほしい。
- ・社会観が欠如している学生、院生が少なくないことに驚いている。その結果自らを客観視できず、過度の万能感や無力感に陥ることにもなる。社会観を育てる授業を設け、人文学や社会科学も、実学を豊かにし、その可能性と創造性を広げる役割を実感させるようなカリキュラムを築いてほしい。
- ・単なる机上の空論ではなく、実行する場面も求めたい。同じ日本人同士、もしくは同じ学生・院生同士ではなく、学外の人とも力をあわせて構想を実現できる舞台を用意してほしい。

宮城県高等学校 PTA 連合会

(小笠原委員)

- ・知識の習得、活用、さらに知りたい、学びたいという探求心に繋げ、それがスパイラルのようにどんどん伸びていく力を養うことが、教養教育の役割ではないか。それがひいては、学びの連続性と知の総合となり、一人一人が、生涯にわたり学び続ける意欲と豊かな人生を築きあげていくことになる。

高校関係者

(渡邊委員)

- 学び続ける姿勢、それを可能にする学習方法の確立を支援する教育を求めたい。
体験学習を重視し、様々な機会を捉えて「意識づけ」を図り、内発的な学習意欲とそれを支える基礎となる学問、すなわち、語学や専門教育の基盤となる部分をハードに鍛え、バランスを備えた学生を育ててほしい。
- その意味でも、東北大学の明示した 6 つのキイ・コンピタンスの形成に高度教養教育の果たす役割は大きい。

(倉光委員)

- 6 つのキイコンピタンスの構造化と体系的な教育によって高度教養教育の目的を明確にする。高度教養教育・学生支援機構に投下された新たな人員・予算のアセスメントのありかたを明らかにして、高度教養教育の学習成果の可視化を促進させる。
- 全国の先進的な課題研究に取り組む SGH 校との「連携」を図り、SGH 校の 3 年間の優れた課題研究成果を、東北大学の高度教養教育プログラムに「接続」させ、グローバルな修学環境においてより高度に発展・開花させる仕組みづくりを行ってほしい。
- グローバルな起業家を志す学生に、大学の遊休の知的財産（大学特許など）をシーズとして与え、事業の立ち上げ、資本市場へのアクセス、産・官・学・金融のオルガナイズ機能、マーケティングなどを支援できる体制を整え、大学発のベンチャーを企業の協力を得て取り組む。学生に事業化の経験を積ませ、グローバル人材・イノベーション人材を育成することに、新機構の機能を活用することはできないものか？

学部学生・大学院学生

(清水委員)

- なぜ「ゆとり教育」をはじめとした教養教育は批判にさらされやすいのかということを考える必要がある。教養教育に対する批判には、いつも教養教育の「薄さ」に対する批判が含まれていた。短時間で幅広い分野の知識の「うわっぺり」をなぞるだけでは何にもならない。
- 「学際性」や「知識偏重の回避」というキーワードにつられるあまり、「本物」にふれあう機会を学生に与えないということがままある。「本物」とはなにか？本物の研究者が、研究をするにあたって、どの様な方法論を使って対象にあたっているのかという視点を学生にあたえることである。

(弓野委員)

- 「論理的な文章を書く」ということは、あらゆる場面で有利に働くので、学科、学部を問

わずその力をつけていくべきであるが、現在の教養教育ではその力につかない。なぜならレポートに対する具体的なフィードバックがほとんど存在しないから。

- 文章の構成の仕方を教える授業や、わかりやすい論文を書くこと自体を主体とした授業、授業のレポートを詳細にチェック、フィードバックできるような体制の充実ができないものか。

(関根委員)

- スカイプなどを用いた柔軟な講義をお願いしたい。川渡をはじめとする付属施設でもスカイプ等で、授業を受けることが可能となれば、授業の選択の幅が広がり、学ぶ機会が担保される。
- 特に理系学生には倫理の教育を徹底すべきである。学部のできるだけ早い段階で、生命倫理等の基礎を学び、自らの考えを確立しておくことはその後の研究を進めるに当たって重要となる。

外国人学生

(王委員)

- 国際マナーを理解し、英語を身につける教養教育を求める。グローバル社会に通じる国際標準の学生を育てる教養教育を求める。
- 自分の意見を主張でき、相手の主張を理解した上で議論することは学問のみならず、一般的な社会問題への理解を深める唯一の方法でもある。教養教育の中でも、国際マナーや国際基準を教える必要がある。

(クレワッタナクル委員)

教養教育は学生に自分の専門以外の幅広い知識を持たせることが大事である。

議事録：各委員の意見書

高度教養教育・学生支援機構教養教育諮問会議諮問事項

国立研究開発法人 産業技術総合研究所

理事長 中鉢 良治

① 東北大学でどのような学生を育ててほしいかー期待

- ・最近の大学は、やや実利に引っ張られて、学術から技術に重きをシフトしているように感じる。企業は、高い技術力、優れた研究開発能力を有する人材を欲していることは確かであるが、同時に豊かな人間性をも育む大学教育にも大いに期待している。
- ・産業界は、大学で得た新しい技術や知識を携えて企業に入ってくる学生に期待している。しかし、それは単なる運び手ではなく、「将来大きく開花する人材」としての期待である。何が問題かに気づき、自らの頭で考え抜き、さまざまな試行錯誤を経て解決に至る力を備えた人材を求めている。このような人材を教育により育成することは容易ではないが、研究に対する目的意識を明確に持たせ、一緒に考え、正しい方向へ導き、成功体験を分かち合うことが重要ではないか。
- ・また、産業界には以前から、大学教育にコミュニケーション能力の涵養を求める声が強い。企業の中の協働作業に限らず、ものやコトを作ったり売ったりするには、人と人との協力が不可欠である。コミュニケーション＝言語能力と狭く捉えず、人間関係を構築するさまざまな能力を養う教育をお願いしたい。
- ・さらに、学生が主専攻に加えて、副専攻を持つことを提案したい。一つだけでもマスターすることが大変な専門分野を二つに増やすことには相当な努力が必要である。しかし、副専攻を持つことによって、従来、線でしかなかった専門知識が面のような広がりを持ち、社会との接点もより多様なものになり得る。

② 教養教育として何を求めるか

- ・教養課程について、学生の側からすれば、おもしろくない、役に立たない、早く専門教育を始めて欲しいという意見もあることだろう。しかし、教養教育に携わる先生には、18～20 歳という多感で、何にでも興味があり、何でも吸収できる若者の、その後の人生を左右する貴重な時期の教育が任されている。その人間の人生に多大な影響を及ぼすことのできる特権を与えられていると言っても過言ではない。その機会を有効に使って欲しいし、ぜひ「おもしろい」講義、「本物の」講義をしていただきたい。
- ・教養教育が何の役に立つのか、若者にはわかりにくい。一つ申し上げるとしたら、社会がグローバル化する中で、日本の文化、日本の歴史、日本の社会を語れる人間を育てて欲しい。それは、個人のアイデンティティの探求かもしれない。己がどこから来てどこへ行こうとしているのか、という認識を持つことかもしれない。視野を世界に広げると共に、日本人として何ができるかを考えられる人間になって欲しい。教養に実利を求めるべきではないが、それが己を助け、国を助けることにも繋がることを理解して欲しい。

高度教養教育・学生支援機構教養教育諮問会議諮問事項

読売新聞東京本社

専門委員 松本 美奈

① 東北大学でどのような学生を育ててほしいか——期待

次世代をきちんと育てられる社会人を輩出してほしい。小、中学校、高校、大学の教育現場で教える教員にとどまらず、企業や団体、官公庁などあらゆる場面で、次に続く世代に「社会」と「個人」との関係を伝え、その中でどう考え、行動することが世界をよりよくすることができるかを考えさせることのできる人の育成である。

そうした人に不可欠の素養は、「構想力」と「実現力」である。現状を把握して、課題を抽出したうえで、どのような社会を目指すのか「構想」し、そこに向けての「戦略」を立て、「戦術」を練り、「戦力」をそろえることができる人である。

いま、産業界や官公庁を取材する中で実感するのは、大学教育に対する根強い不信感だ。「指示されたことしかしない」「知識はあるが、意見を尋ねると黙ってしまう」「自分で考えて新しいものを創り出す発想力もガッツもない」「社会観がない。幼い」……。つまり、実社会で働く大学卒、大学院修了の若者に対する不満がその根底にはある。

決して安くない学費を納めさせ、国から運営費交付金（私学の場合は補助金）まで受け取っているが、この程度の学生しか育てることができていないのかという不満である。大学の重要な使命の一つに、学生を育てることがある。その基本すらできない大学に、税金を投入する意味はあるのか、という不満なのだ。

中でも国立大学に対する声は厳しさを増している。2004年の法人化以来、削減されている運営費交付金に対し、国立大学内や関係者から怨嗟の声はあがっても、一般社会から見直しを求める声が上がらないのは、その証左ではないだろうか。毎年膨張する社会保障費を抑えてまで「特別扱い」する意味を社会は認めていないとみえるのだ。

もちろん、大学にも言い分はあろう。そもそも初等中等教育で基礎学力をつけ、学ぶ意欲を喚起し、学習指導要領がうたう「考える力」を養成さえしていれば……。だが、その初等中等教育で教べんを持つのも、大学卒業者なのだから、この議論は結局堂々巡りを余儀なくされる。

こうした不毛な議論に終止符を打つためにも、大学、特に毎年1兆円以上の国費を投入されている国立大学は、社会の期待に応えられる人を育てる必要がある。国立大学協会の会長校でもある東北大学にはぜひ、国立大学の存在意義、さらには東日本大震災の被災地の復興を担う拠点校として、新しい日本の高等教育像を示してほしい。

② 教養教育として何を求めるか

最低でも、①新聞を毎日読み、②社会を客観的に論じることができ、③他者と意見をぶつけ合い、④力を合わせ、新しい知を作り出せ、⑤発信できるような人を育てる教育を構築してもらいたい。⑥個々の授業、教員に任せるのではなく、カリキュラム全体を、大学が責任をもって築き上げてほしい。

- ① 社会観を育てる授業を設けてほしい。大学の教育現場を取材する中で、新聞も読まず、ニュースも見ないままで、社会観が欠如している学生、院生が少なくないことに驚いている。その結果、自らを客観視できず、過度な万能感や無力感に陥ることにもなる。そもそも社会の現実から離れた学問はあり得ない。人文学や社会科学も、実学を豊かにし、その可能性と創造性を広げる役割を担っていることを実感させるようなカリキュラムを築いてほしい。
- ② 単に社会観を育てるだけでなく、客観的に論じる場面（できれば大学外の人も聞くことのできる公開の場）を数多く作ってほしい。社会を客観的に論じることが、学問の重要性を再認識することができ、深い学びにつながるのではないか。
- ③ 人と向き合う際に重要なのは、「言語能力」だ。自分の狭い「専門知識」を、難解な専門用語で語ることはできても、中学生でもわかる平易な言語で説明できる人はごく限られていると感じている。大学以外の人間とも意見をぶつけ合う場面を多く設けてほしい。
- ④ 単なる机上の空論ではなく、実行する場面も求めたい。ただ、同じ日本人同士、もしくは同じ学生・院生同士ではなく、学外の人とも力を合わせて、構想を実現できる舞台を用意してもらいたい。
- ⑤ 最後に発信する力。③と重複するが、平易な言語で発信できる力を、公開の場で示してほしい。
- ⑥ 授業を教員の聖域とするのではなく、アドミッションポリシー、カリキュラムポリシー、ディプロマポリシーを明示した上で、大きな見取り図を描いた上でカリキュラムを築いてほしい。

高度教養教育・学生支援機構教養教育諮問会議諮問事項

宮城県高等学校PTA連合会

事務局長 小笠原 朋之

① 東北大学でどのような学生を育ててほしいかー期待

本会の嶺岸若夫会長は、農業を生業にしています。自らが育てたお米や野菜を地域の幼稚園や小学校の給食に提供するとともに、小学生たちを招いて田植えの体験学習を行っています。また、前会長の野田もと子さんは地域ボランティア活動に取り組み、子どもたちの目線から親として何ができるかを考え、実践しています。お二人から学ぶことは、謙虚に社会の中で貢献している姿です。この姿勢は、お二人が積み上げてきた学びの中から生み出されてきたものであると推察されます。

貴学は、「研究第一」、「門戸開放」、「実学尊重」の理念に基づく建学精神を貫き、これまで多くの有為な人材を輩出しています。この建学精神を東北大学の門をくぐり、学ぼうとする学生諸君、学んでいる学生諸君の体内に流れている血のように浸透させ、ひとつひとつ学んだことを積み上げていく尊さと粘り強く生き抜く力を体得し、進取の精神を発揮し未来を創造する人間となることを期待します。

② 教養教育として何をもとめるか

文科省の資料を読むと、「学問のすそ野を広げ、様々な角度から物事を見ることができる能力や、自主的・総合的に考え、的確に判断する能力、豊かな人間性を養い、自分の知識や人生を社会との関係で位置付けることのできる人材を育てる」ことを教養教育に求めています。この理念こそ、学ぶ意欲に火をつけ、将来に生き甲斐を見いだすことにつながると思います。知識の習得、活用、さらに知りたい、学びたいという探求心につなげ、それがスパイラルのようにどんどん伸びていく力を養うことが教養教育の果す役割ではないかと考えます。それがひいては、学びの連続性と知の総合が結実し、一人一人が生涯にわたり学び続ける意欲を持ち、豊かな人生を築き上げていくことにつながると考えます。

私は生徒指導の問題が多発する高校に勤めていたことがあります。そこで出会った生徒たちの本音は、「自分たちも学びたい。学んだことを役立てたい。人の役にたちたい。しかし、誰もそのことを分かっている。」という思いです。この思いこそ、教養教育のあるべき姿ではないかとも考えています。

高度教養教育・学生支援機構教養教育諮問会議諮問事項

仙台第二高等学校

校長 渡邊 幸雄

① 東北大学でどのような学生を育ててほしいかー期待

・本校（仙台第二高等学校）は、貴大学に隣接しており、多くの生徒が貴大学への進学を希望している。また、実際に卒業生も含めると年間 100 名程度が本校から入学しており、貴大学の課題・大学への要望と本校の課題・本校の使命、すなわち、「東北大学にどのような学生を育ててほしいか」ということと、「仙台二高でどのような生徒を育てていきたいか」ということはかなり重なる部分が大いにあると思っている。したがって、下に記すことは本校生徒にもあてはまるのだが、それは、一旦脇に置いて記載することとする。

・一言で言えば、「骨太の人材」の育成である。

「真摯な姿勢で物事に対処し、度量の大きな心豊かな若者」である

さらに、「自ら主体的に行動し、社会に貢献し、世界をリードしうる人材」を育てて欲しい。（実は、上記は、本校の育てたい生徒像である）

・そのためには、②で記す教養教育をしっかりとやっていただき、力のある学生を育てて欲しいし、特に、最近理系に比べやや地味なイメージの文系学部にも、さらなる発信を期待したい。是非、世界を、日本を、そして東北をリードする人材を育てて欲しい。

・また、東北大学に限らないが、コミュニケーションカ等に課題がある学生も見られる。昨年まで、2 年間「教育課程論」の担当で、年間 3 回（90 分×3 回）ほど講義をする機会を得た。多くの感想は、「学校現場のことが生徒の時とは違った視点で捉えることができた」という肯定的なもので、要望にしても、「こちらの気づき」を促すようなものであったが、細かいことにこだわっているような感想も二、三名見られ、該当者に対し、むしろこちらが心配になることもあった。高校までで形成される部分も大きいのであろうが、この点についても気になるところである。

・さらに、一般常識・マナーを欠いた学生もなくもない。先日まで、大学関係の大会が続いていたと思うが、バスの車中が混んできたにも関わらず、トランクを脇におき、2 人分の座席を占有して、素知らぬ顔（東北大学の学生かどうかは不明、また、本人もバツが悪かったかもしれない）で、何も行動できない様子を見るとがっかりしてしまう。

交通関係でも、本校の前は坂になっており、スピードを緩めずに走ってくる自転車（東北大生と思われる）も少なくない。近隣住民から本校へ苦情やお叱りもいただくが、（お互い様であろうが）その内の何割かは東北大生ではないかと思っている。

② 教養教育として何を求めるか

- ・学び続ける姿勢、そしてそれを可能にする学習方法の確立を支援する教育を求めたい。
昨年まで2年間、大学において講義をする機会を得た。「高校時代に受けたかった教育」を聞いたところ（いくつかのレポートの題の中の一つ）、講義型だけではなく、自分で調べ、論を組み立て、意見を発表するというようなこともしてみたい、そして現在、そのようなレポートに苦勞しているということを書いてくる受講生も何人かいた。もちろん、高校でも、アクティブ・ラーニングに象徴されるように、学び方・教え方について、常に検討・改善を目指しているところである。
- ・また、本校で、最近特に力を入れているのは、体験等により様々な機会を捉えて「意識付け」を図っていこうとするものである。大学でも同様であろうと推察する。
- ・上記の意識付けからも醸成される内発的な学習意欲と、それを支える基礎となる学問、すなわち、語学や専門教育の基盤となる部分をハードに鍛えていただき、バランス良く育てていただきたい。その意味でも、「6つのキイ・コンピテンシー」で掲げてある、「①専門力」、「②鳥瞰力」、「③コミュニケーション力」、「④問題発見・解決力」、「⑤異文化・国際理解力」、「⑥リーダーシップ力」の形成に、教養教育が果たしていく役割は大きいと思われ、大いに期待したい。

参考：本校のキイ・コンピテンシー

【A】 Action(行動力)

【B】 Basics(基礎力)

【C】 Communication(コミュニケーション能力)

【D】 Diversity(多様性への理解力)

【E】 Experience(体験力)

高度教養教育・学生支援機構教養教育諮問会議諮問事項

東北大学文学研究科

DC1年 清水 翔太

① 東北大学でどのような学生を育ててほしいかー期待

「東北大学でどのような学生を育ててほしいか」

その質問に対し、私自身の個人的な期待を素直に述べるのならば、「自分の人生を幸福であると思える学生を育ててほしい」というのが正直な答えである。

しかし、幸せという形而上のものを数字で図るわけにもいかず、教育機関として如何なることをすれば学生の幸福度が上がるのか、ということも到底言えそうにない。

そうなるとやはり外部（内部？ 上？）からの要請に応じて「対外的なアピールに使える学生を東北大学は育てるべきである」という考えに至るのは至極まっとうなことであると思う。

東北大学の卒業生が世界的な成功を収めそれが呼び水となり、さらに優秀な頭脳が大学に集まり、金回りもよくなり全てがよくなるというプランは非常に魅力的なものだ。

そのためには、本学の教育実績はもちろんのこと、その功績を内外にアピールする力が必要となってくるのではないだろうか。

ただ、最終的なところで重要なことは学生一人一人の幸福であるということは常に考えていきたいと思う。

② 教養教育として何を求めるか

私は所謂ゆとり世代の出身である。ゆとり教育のキーワードは「問題設定・解決能力の育成」や「グローバル化」、「学際性」などといったものであった。そうした理念は東北大学が教養教育に求めるところと重なる部分が大いにあると思う。

しかし、周知のようにそうした崇高な理念があったにも関わらず、ゆとり教育は大きな批判にさらされ、現在では再び学力偏重の教育が行われているようである。

こうした流れが良いことなのか悪いことなのかは全く分からないが、なぜゆとり教育をはじめとした教養教育は批判にさらされやすいのかということを考えることは肝要である。

思えば教養教育に対する批判にはいつも教養教育の「薄さ」に対するものが含まれていた。短時間で幅広い分野の知識のうわっぺりをなぞるだけでは何にもならないというような論調だろうか。

こうした批判を聴くにつけ思い出すのは、文学部でよく耳にする「原典にあたれ」という言葉だ。仮にゲーテの研究をするとして、ゲーテの本のあらすじを書いた本や、ゲーテ研究の本を読むのではなく、ゲーテ自身が書いたテキストそのものを原語で読んだ方が意味深いということだ。

教養教育の現場において、「学際性」や「知識偏重の回避」というキーワードにつられるあまり「本物」に触れ合う機会を学生に与えない、ということがままあるように思われる。

「本物」とは何か？これは外国語教育にはネイティブの教員を使うとか、実験を多用して五感を使うとか言ったことではない。本物の研究者が、研究をするにあたってどのような方法論を使って対象にあたっているのかという視点を学生に与えることが重要なのである。

その結果学ぶことの幅が狭くなろうとも問題はない。一つの道を極めるということは、道の極め方を知ることなのだから。

高度教養教育・学生支援機構教養教育諮問会議諮問事項

東北大学工学研究科

DC3年 弓野 沙織

① 東北大学でどのような学生を育ててほしいかー期待

大学では、社会のニーズに応えられる人材を輩出すべきと考えるので、まだ社会経験のない学生にこの質問をされても答えようがない、というのが正直な感想である。

しかし、指導教員である持田教授が今年度より工学研究科の教務委員長を務めており、折に触れて打ち合わせ等で一緒になる企業の方に「大学教育で、学生にどのような力をつけさせたらよいか？」という質問を投げかけているのをよく聞く。そこで私が最も印象に残ったのが、「論理的な文章を書く力がついていない若い社員が多いと感じる。文章力をつけられるのがよい。」という意見であった。

確かに、研究室の学部4年生、修士の学生の論文を指導していて、論理的な文章を書く（書き込まなければいけない情報を階層化し、取捨選択し、順序立てて記入するなど）ということが苦手な学生は多いと感じる。また、論理的な文章力は、論文のような高度に専門的な文書だけでなく、研究室内の事務連絡用のレジュメなどの明快さ、誤解のなさにも影響すると感じている。

以上より、私としては、東北大学は論理的な文章が書ける学生を育成していくことが大事ではないかと考える。

② 教養教育として何を求めるか

①からの続きとなるが、論理的な文章を書くということはあらゆる場面で有利に働くので、学科・学部を問わずその力をつけていくべきではないかと考えている。しかし、現在の教養教育ではその力はないと考えている。

専門教育以外の授業が教養教育に入るとするならば、私が学部生の頃は、レポートは色々な授業で課されたが、レポートに対する具体的なフィードバックはほとんど存在しなかった。よくあるのは、学期末にレポートを課されて提出し、半月～1か月後にネット上に成績がアップロードされている、という状態である。そのときはレポートは一生懸命書くのだが、そのレポートのどの部分が良かったことも悪かったとも、誰も教えてはくれない。分かりにくい文章を書いたとして、内容が大間違いでない限りは単位を落とすこともほとんどないはずで、これでは専門知識の勉強にはなるが、文章を書く勉強には全くなならない。

私が論理的な文章を書くことを意識し始めたのは専門科目が始まってからで、授業によっては担当教員が熱心で、毎回レポートを課し、それを TA が採点、コメントを入れてくれる機会が増えた（これも TA の学生の無償の長時間労働の上に成り立っており、制度上の問題はあると感じているが）。具体的なフィードバックがあると、どういう書き方が問題で、何が好まれるかということが分かってくるので、毎回のレポートごとに問題意識を持って文章を書くようになった。

さらに、私の文章力が飛躍的に向上したのは研究室に配属された後だったと考えている。卒業論文や学会に投稿する論文を担当教員に何度も何度も添削してもらい、どうすれば読み手に誤解無く伝わるかを締切ぎりぎりまで検討する、という作業がとても大きいと思う。また、このように文章を論理立てて書くことで、頭も整理され、論理的思考力も向上したように感じている。

教養教育で、研究室で研究論文を書くまでのことを行うのは難しいかもしれないが、文章の構成の仕方を教える授業や、わかりやすい論文を書くこと自体を主体とした授業を受けさせたり、授業のレポートを詳細にチェックし、学生にフィードバックするような TA の採用を増やすことがあるとよいのではないかと考えている。

高度教養教育・学生支援機構教養教育諮問会議諮問事項

東北大学農学研究科

MC1年 関根 綾

① 東北大学でどのような学生を育ててほしいかー期待

グローバル化する世界の中で、国際的に活躍できる人材の育成が必要であると共に、地域のリーダーとなり地方創生に関わっていく人材も必要であると考え。情報、経済の中心地である東京に人材が流出し、衰退の一途をたどっている地域が多くあるのが現実である。東北地区にキャンパスを構える大学として地域の再興、震災からの復興を担う力強いリーダーを育てていく必要があると考える。近年では、地域単位で海外と産業や観光の交流を行う地域も出てきている。その際には英語力、コミュニケーション力が必須であり、地域と世界を「繋ぐ」役割の人材が求められるだろう。東北大学にはこのような人材を育てて欲しい。地域が活気づくことはひいては日本全体の力となり、国際的な競争力を高めることにも繋がると考える。

② 教養教育として何を求めるか

内容というよりも形態であるが、スカイプなどを用いた柔軟な講義が受けられれば良いと考える。私自身、農学部の川渡フィールドセンター（大崎市鳴子温泉）に所属しており、大学院の講義の際は片道2時間かけて車で通っている。前期は週2、3日講義があったため、なかなか研究との両立が難しかった。また、曜日や時間との兼ね合いで興味がある講義が取れず、せっかくの学びの機会が失われてしまったと思う。そのように不利な点があるため、研究内容には興味があるが川渡フィールドセンターの研究室に来ることを諦める学生も数多い。川渡をはじめとした付属の施設でもスカイプ等で授業が受けられれば、このような選択の幅が大きく広がると考える。

内容に関しては、特に理系学生には倫理の教育を徹底すべきであると考え。研究者倫理が話題に上ることが多くなっており、一般の方の目も厳しくなっているところである。学部のできるだけ早いうちに生命倫理等の基礎を学び、自らの考えを確立しておくことは、その後研究を進めていくにあたって重要なことであると考え。

高度教養教育・学生支援機構教養教育諮問会議諮問事項

東北大学経済学研究科

DC2年 王 珊

① 東北大学でどのような学生を育ててほしいかー期待

東北大学でグローバル人材になるような学生を育ててほしいです。その背景として、やはり各分野において国際競争がますます激しくなっており、企業の海外展開から日常生活まで、グローバル化の影響を隅々まで浸透しています。

そのため、日本のことのみならず、広い視野で今後の発展トレンドを把握でき、自ら考えて行動するような人材が求められています。

東北大学の学生の能力は十分高いと認識しております。しかし、自分自身のことしか興味がなく、社会全体の問題や国際問題などに無関心の学生もかなりの割合を占めているように感じられます。授業・セミナーなどにおいて、個人の見解が求められても、見解がない、または上手く述べられない現象はしばしば見られますが、そのような学生は社会に立つと競争上では極めて不利になります。このことは大半の学生自身にも分かっていると思いますが、それでもなかなか行動しないのは、グローバル競争を十分に認識していないからだと思います。危機感がなければ動かないのは、誰にでも同じです。

また、東北大学の学生には普遍的に英語力が足りないように感じています。それには幾つかの原因があると思いますが、まず制度上の問題が挙げられます。国際主流の TOEFL や IELTS ではなく、TOEIC や TOEFL ITP など、相対的に低い基準が使われているからです。そして、実際に会話するシーンも少なく、試験ができて話せないケースがしばしばあると思います。例えば、経済学研究科に多数の留学生が在籍していますが、その大半は日本語を勉強しており、日本語を使って授業を受け、日本人学生と交流しています。そのため、せっかく外国人と話せるのに、英語を使わずに済む状況が生まれ、英語会話を上げることに貢献しません。そういう意味では、IPEM や GPEM のような英語コースはよかったと思います。英語を使って外国人と意見交換をすることで、自分自身の視野も広がりますし、英語力も上達します。

② 教養教育として何を求めるか

国際マナーを理解し、英語を身に付ける教養教育が求められるのではないかと思います。英語については先述しましたので、ここでは国際マナーについてお話します。もちろん、日本人のマナーは非常によいと私も思っています。しかし、それが世界範囲で通用するかどうかは問題です。例えば、謙虚、周りに合わせるなど、評価される場合もあれば、それが足止めになる場合もあります。欧米は言うまでもなく、隣国である中国の学生でも、かなりの割合で自分の意見を主張する傾向があります。お互いに見解を述べ、相手の主張を理解した上で議論することは、学問のみならず、一般的な社会問題への理解を深める唯一の方法ではないかと思います。つまり、教養教育としては、国際マナーや国際基準を学生に教えるべきです。

高度教養教育・学生支援機構教養教育諮問会議諮問事項

東北大学工学研究科

MC1年 シリンダ・クレワッタナクル

① 東北大学でどのような学生を育ててほしいかー期待

東北大学に企業や社会に出たら使える人間になる学生を育ててほしいです。具体的にいうと、学部までの学んだ知識は理論的しかないからあまり研究や仕事に使えないと思います。専門の講義では基礎的なことだけを行って、その理論をどうやって応用すればいいかを増やしてほしいと思います。

また、大学院では倫理の講義がありますが、学部の段階ではあまりなかったと思います。なので、学生が倫理観を持つ人間になるために、倫理の講義などを増やせばいいと思います。

最後に、日本人は外国の人に壁のようなものがあると良く感じられますので、東北大学にいろんな文化を理解と受け入れられる学生を育ててほしいです。

② 教養教育として何を求めるか

教養教育は学生に自分の専門のことだけではなく、他の知識も知ようになるための教育だと思います。求めるのは学生に幅広い知識を持つことだと思います。

議事録：審議記録

司会（羽田）：皆さんこんにちは。お忙しいところ、ご参集ありがとうございます。これより、東北大学高度教養教育・学生支援機構諮問会議を開催したいと思います。私は、進行を仰せつかりました副機構長の羽田と申します。よろしくお願いいたします。最初に、資料の確認を行いたいと思います。委員の先生方のお手元には資料がございますが、最初に諮問会議と書かれた議事進行がございます。めくって頂いて（資料1）本日の委員の方々のお名前がございます。これは後で、自己紹介をよろしくお願いいたします。めくって頂きまして、（資料2）が座席表でございます。めくって頂きまして、（資料3）意見書がございます。これは先生方に事前にふたつの問題についての諮問をお願いしておりまして、その意見書でございます。本日の議題として、ご報告等をお願いしたいと思います。最後の方に行きまして、（資料4）がございます。かなり意見書が長いのですが、高度教養教育・学生支援機構規程というふうになっておりまして、（資料4）がこの規程でございます。この規程の第12条に、高度教養教育諮問会議の事項がございます。機構長の諮問に応じて組織及び運営について協議し、機構長に対して、助言及び提言を行うために、高度教養教育諮問会議を行っております。本会議は、これが根拠規程ということでございます。めくって頂きまして（資料5）内規がございます。本会議の組織構成を示すものでございまして、委員が20名以内、学部学生、院生等々を含めて構成することになっております。この中に、高度教養教育諮問会議に議長及び副議長1名を、それぞれの委員の互選によって定めるというふうになっております。後ほど議長の選出を行いたいと思

います。最後、（資料6）が後ろについておりますが、東北大学高度教養教育・学生支援機構の設立と展望。これは後に、機構長の方からこの機構がどういう目的を持って出来たかというご説明をする時の資料でございますのでよろしくお願いいたします。お手元の資料、間違いないでしょうか。ご確認ください。それでは、次に機構長の方から本機構の成り立ちと、何を目的にしているかということのご説明をお願いしたいと思います。機構長、よろしくお願いいたします。



羽田貴史（高度教養教育・学生支援機構副機構長）

花輪：皆さんこんにちは。機構長を仰せつかっております教育学生支援教育国際交流担当理事の花輪でございます。非常にお忙しい中お集まり頂きありがとうございます。今、司会の羽田先生の方からありましたように、私の方からは本会議の趣旨、それから最後の（資料6）を使いまして、本機構のご紹介をしたいと思います。座ってご説明申し上げます。高度教養教育・学生支援機構ですが、この機構は昨年の4月に発足いたしました。ちょうど1年と半年経っております。この機構を作る過程の議論におきまして、通常色んな部局、学部あるいは研究科のことを部局という言葉で表現しますが、各部局には諮問会議という

ものが設置されております。これは各部局の活動に対して、定期的に外部の目で、と言いましょか。色々ご意見を聞いて、部局の運営をさらに向上させたい。そういう目的で設置しております。本機構も、第三者の立場で機構の活動に対して、色々ご意見をお伺いしたいということで、高度教養教育諮問会議、こういう会議を設置させて頂きました。羽田先生の方からも紹介ありましたように、(資料4)の内規に規程では第12条にこれがうたわれております。さらに、資料の5の方に委員の構成等々が書いてありまして、ちょっと詳しく見てみますと、第3条をご覧ください。(資料5)諮問会議の内規の第3条、委員は本学の学部学生、大学院学生、及び外国人学生(以下学生という)並びに、本学の学生の保護者、企業の関係者、地域の関係者、高等学校の関係者等のうちから機構長が選考するということで、今回皆様方に、委員にご就任頂いたということになっております。保護者というところが、今回どなたも入っていないんですけれども、これは今後の課題というふうにさせていただきます。それから第5条として、この諮問会議、原則として年に1回開催するということになっております。昨年の4月発足してありまして、実は今回が第1回、初めての会議ということになっております。委員の名簿をご覧になってお分かりのように、今回非常に幅広い層から委員になって頂いております。繰り返しですけれども、保護者の方は今回選ぶことが出来ませんでした。委員の皆様方には、こちらからの依頼に対しまして快くお引き受けくださったことに対し、感謝を申し上げます。この諮問会議ですけれども、テーマを決めて議論して頂いた方がいいのではないかとということで、今回ふたつのテーマでご意見を

頂きたいというふうに考えました。ひとつ目が「東北大でどのような学生を育ててほしいかー期待」というものであります。私たちも後にお話しますけれども、こういう人材を東北大では育てたいと。それは里見ビジョンという総長の名前を冠したビジョンの中にうたっているんですけれども、それがどのぐらい第三者から見て叶っているのかどうか等々、我々としても確かめてみたいということが目的のひとつです。この中に学生の方、たくさんおられるんですけれども、この質問、ちょっと答えにくかったのかなと。まさに今、教育を受けている立場でどう答えていいのか、答えるのに苦心されたと思いますけれども、自分はこういうふうに今後社会に出てなっていきたいかと。そのためには、この大学に在籍している間にどういうことを学んでいきたいかと。そのためには自分が頑張るんだけれども、大学の方からもこういう教育があればいいんじゃないかと。そんなところをお話頂ければいいのかなというふうに考えております。ふたつ目の議論のテーマですけれども、教養教育として、何を求めるか。教養教育、非常に幅広い言葉でありまして、人それぞれ考えるところが違っているだろうというふうには思います。ですが、T型人間、 π 型人間等々、色んなことを言われますけれども、たこつぼ化された専門教育のみでは、すぐには役に立つかもしれないけれども、すぐに役に立たなくなるということで、それを支える幅広い土台がないといけないと。そこのところが、教養教育といったもので身に付けるべきものですと。そういうことも言われております。言うのは簡単なんですけれども、じゃあ具体的にどういうものが教育として成り立つのかと。そういったところというのは非常に

人それぞれご意見違うのかもしれませんが。そういったところを考えていくものとして、このテーマで皆さんのご意見を頂けたらと思います。今日は4時半までの長丁場ですけれども、忌憚のないご意見を頂ければというふうに思います。それでは、残りの時間10分ぐらいありますので、本機構の中身の説明をしたいと思います。お手元にある資料、(資料6)ご覧ください。一番後ろのパワーポイントの印刷物であります。東北大学高度教養教育・学生支援機構の設立と展望ということで、お話をさせていただきます。1枚めくってください。実は2012年、今から3年半前に現在の総長、里見総長が就任されました。同時に私もこの立場に就任したんですけれども、その時に当時教育に係る本学の組織が非常にたくさんあったということ。それからもうひとつは当然のことながらですけれども、大学に、高等教育に関する期待が非常に大きい中で、どんどん社会環境も変わっているし、教育環境も変わっているし、教育の中身も変わってきているということで、今のままでいいんだろうか、というような問題意識を持ちまして、本学の教育のあり方を検討してきました。それが背景としてあります。その2ページにありますように、解決すべき多くのグローバルイシュー。全球的な問題がありますと。日本でも色々問題を抱えています。さらに、高等教育を取り巻く課題も色々指摘されていると。そういう中で、日本の社会的に言えば、下のコラムにありますように、グローバル人材、あるいはイノベーション人材と、そういう言葉で表現されるような人を企業は欲しいと。高等教育側にそういう人を育ててください。そういう要望もあるということです。次のページ、3ページをご覧ください。そういった中で

同時に、本学の教育としてどういう人を育てていこうか。あるいはパラレルで議論してきたんですけれども、それをまとめたものが里見ビジョンの、ビジョン1であります。これは、里見ビジョンは教育に限らず、研究等7つの分野にわたってビジョンを掲げているんですけれども、ビジョン1が教育に関するビジョンで、次のような言葉でまとめました。「学生が国際社会で力強く活躍出来る人材へと成長していく場を創出します」と。このもとに重点戦略①から③。①がグローバルリーダーを育成するための、教養教育の充実等を核とする教育改革を行っていきます。②がグローバルな就学環境を整備しますと。③が学生支援の充実強化をしますと。こういう戦略のもとに、さらに施策をいくつか作っております。右側のコラムをご覧ください。これらを達成するためには、やはり本学教育の改革、組織の再編。これが必要ですよという結論になりました。1枚めくってください。まず、じゃあ育てる人材。どういう力を持っている人材ですかということを議論いたしまして、左側の大きな四角の中にありますように、6つの力を持っている人材を育てることが必要ですということで、①の専門力から、⑥のリーダーシップ力まで、こういう力を付けるような教育をしなければいけないという議論をしております。そこで、その当時の東北大学の教育の現状を分析してみますと、やはりそのままではいけないということになりまして、一番下のコラムにありますように、教育改革を今、すべきであるという結論に達しました。そのためにはふたつあります。まず、中身の方ですね。これは高度教養教育という言葉で表現したんですけれども、現在にマッチした新たな課題がたくさん出ているわけですから、それ

に正面からぶつかっていけるような力を付けるために、新しい教養教育が必要であろうということです。ふたつポイントがありまして、ひとつは従来までですと1年生、2年生で教養教育をやって、3年生、4年生、大学院は専門教育だと。そういう考え方が主流なんですけれども、決してそうではない。教養教育というのは、大学に入った時から、出る時までその段階、その段階に応じた教育があるはずであるというのがひとつ。もうひとつは教育の中身、やり方ですね。今までのように単に座学と言いますか、先生が一方的にお話して、それを学生が聞くというスタイルではなくて、積極的に学生自身が動くと言いましょうか、活動すると言いましょうか。アクティブラーニングという言葉がありますけれども、そういうものに、教育の仕方も変えていかなければいけないと。そういうものを、高度教養教育という言葉で表現しました。もうひとつは組織も変えましょうということで、冒頭にお話ししましたように、その当時たくさんの組織がある意味バラバラにあったんですけれども、それを一本化しようということで、新しい機構を作りました。具体的には、6つの組織を合わせております。後でお話します。次のページ、5ページをご覧ください。今言いました「高度教養教育の実現のためには」ということで、そこに模式的に書いてありますように、下の方から上の方に学年が進行するんですけれども、入学前の教育から初年次教育、それから高度教養教育がありまして、パラレルに専門教育があると。6つの力をつけてほしいというふうにお話しましたが、それに対応するような科目群を準備しなければいけないと。これを目指して、現在カリキュラムの開発を行っているところで

あります。1枚めくって頂きまして、6ページをご覧ください。これは組織改革のところの組織の再編、改変の歴史的な流れを書いたものです。一番左側に主要教育政策、社会状況等と書いてありますけれども、これはある意味世の中の動きのようなものでありまして、今から25年ぐらい前になりますけれども、大綱化というのが起こりました。この時に、これを受けまして、ほとんどの大学に教養部といった組織があったんですけれども、これを廃止しております。以後、いくつかの変遷がありましたけれども、高度教養教育・学生支援機構は、教養教育のところをきちんとやると共に、その図の一番上側に分野を書いているんですけれども、黄色で示した教養教育の他に保健管理のところ、学生相談のところ、高大接続、入試のところ。それから国際化対応のところ。さらに、また黄色いところに教養教育って書いてありますけれども、本学教養教育に非常に力を入れてきた大学ですが、そのための別の組織も作っていたんですけれども、これらを全部合わせて。それから学習支援、キャリア支援というのも書かれております。こういうものを全部ひとつの組織にまとめて、有機的な連携のもとにいきましょうということで、昨年の4月に機構を作ったということでもあります。同時に、その時に右の一番下に書かれてありますような、障害者支援、課外活動支援、教育力向上、教育評価分析の機能も入れております。7ページをご覧ください。これが機構の組織図であります。ちょっと分かりにくいんですが、真ん中の水色で囲んであるところが組織なんですが、教員の所属組織、左側と右側の教育実践組織、こういうふたつの二段構えになっておりまして、先生方一人一人は左側の教員所属

組織のどこかひとつ、それから右側のセンターに所属します。右側のセンターに所属する時には、その先生方の行動する中身によって、ひとつ、もしくは複数のセンターに所属出来るという作りしております。周辺に書いてありますのは、関連組織でございます。1枚めくってください。8ページ目、全学的教育学習マネジメント体制の構築ということで、この組織をめぐる各部局、それから審議組織等々の関係が書かれてありますけれども、ここでは真ん中の水色で囲まれたところの一番下をご覧ください。高度教養教育諮問会議、この会議のことが書かれてあります。右側に吹き出しがありますけれども、学内外の利害関係者の参画による東北大学の人材育成と教育への意見反映ということで、いわゆるステークホルダーという言葉がありますが、ご意見を頂いて、本機構の活動をよりいいものにしようということで設けているということです。9ページ目、ご覧ください。色んなことを書かれていて、分かりにくいんですけども、今回の教育改革ですが、私たちは真ん中に書いてありますように、グローバルリーダーの育成、こういうものを目指しますと。そのためには、ふたつ大きくやる必要があります、左側、教育内容の改革が必要であると。右側が、組織の整備が必要であるということで、組織の整備、これは機構を作ることで、一応形式的には終わっております。現在、鋭意進めておりますのは、左側に書かれた高度教養教育の導入、新カリキュラム、プログラムの開発ということで、現在鋭意進めているところであります。こういう教育改革をして、下の方に赤いまとめのようなものが書かれてありますけれども、アウトプットといたしましては困難な課題に果敢にチャレンジし、世界に

羽ばたく人材を輩出する大学への変貌、これを私たちは考えているということであります。機構の概略を説明させて頂きました。繰り返しですけれども、こういう目的を持って私たち、機構を運営しておりますけれども、ぜひ忌憚のないご意見を頂いて、私たちの次へのステップにさせて頂きたいというふうに考えております。どうもありがとうございました。



花輪公雄（高度教養教育・学生支援機構長）

司会（羽田）：どうもありがとうございました。ちょっと今、この時間だけでは良く分からないものもあるかと思うんですが、これは質疑応答の際にも、ぜひ具体的にこの点はどうなっているんだという点のご質問をお願いできればと思います。それでは、委員の紹介に入りたいんですが、その前にちょっとひとつお断りをしたいんですが、この会議の内容は報告書として出して、色々と学内外にご了解を求めたいということで、録音を取らせて頂くことと、それから写真撮影についてご了解を願いたいと思います。ただ、差しさわりのある方は、ちょっと後でいくらかでも文字は修正出来ますので、どうぞ忌憚のないご意見と、写真の差し替えはちょっと難しいんですけども、もし差支えがあればお申し出ください。ということで、

次に委員のご紹介に行きたいと思います。資料 1 をご覧ください。この中では 3 番の高橋委員が、現在県議会がある関係で今日は欠席をせざるを得ないということのご連絡がございました。その他の方はご出席頂いております。簡単で結構でございますので、順番で中鉢委員の方からご紹介をお願いいたします。

中鉢委員：産業技術総合研究所の中鉢でございます。本学は、1977 年に大学院の博士課程を修了いたしまして、メーカーに入社し、2013 年 4 月から産総研の理事長を務めております。よろしくお願いします。



中鉢良治委員（産業技術総合研究所理事長）

司会（羽田）：ありがとうございます。では、2 番の松本委員、お願いいたします。

松本委員：座ったままで失礼します。読売新聞専門委員の松本美奈と申します。よろしくお願いします。皆さんご存知の方もいらっしゃるだろうし、よくご存知ない方もいらっしゃると思いますが、毎年大学の方に多大なご迷惑をお願いして作っております、大学の實力という調査を 2008 年から始めております。今年で 8 回目で、91%の回答

率でした。大学教育が大きく変わっている中、偏差値や知名度にはよらない大学の中身で大学を選んでもらいたい、それが調査の趣旨です。その調査・取材の責任者として、こちらの取り組みにはとても期待をしています。中でも、大学の学生の皆さん、院生の皆さんと一緒に会議が出来るということを、とても楽しみにしておりました。どうぞよろしくお願いいたします。



松本美奈委員（読売新聞東京本社 専門委員）

司会（羽田）：ありがとうございます。4 番、小笠原委員、お願いいたします。

小笠原委員：皆さんこんにちは。私は宮城県高等学校 PTA 連合会の事務局長をしております、小笠原朋之と申します。本来であれば、地域社会の代表ということで、高 P 連の嶺岸会長がこの場に出席するところでございましたが、仕事の関係で、出席出来かねるということでしたので、代理で出席いたしました。高 P 連という組織は、現在県内の 81 校、これは公立だけでありますが、加盟して組織されております。昨年、60 周年を迎えたところでございます。ひとつ、今日は拙い意見を皆さん方のもとにお伝えするかもしれませんが、よろしくお願いいたします。



小笠原朋之委員(宮城県高等学校 PTA 連合会事務局長)

司会(羽田) : ありがとうございます。続いて5番、渡邊委員お願いいたします。

渡邊委員 : 5番の渡邊幸雄でございます。そこに書いてございますように、仙台第二高等学校の校長をしております。高校の校長協会の方も、担当しております。私も実は、1978年に本学、理学部の数学科を出ておりまして大変お世話になったんですけれども、現在の勤務校でも卒業生、在校生を始め、大変お世話になっております。よろしくお願いいたします。



渡邊幸雄委員(仙台第二高等学校長)

司会(羽田) : ありがとうございます。続きまして、6番倉光委員お願いいたします。

倉光委員 : 仙台二華中学校高等学校の校長の倉光恭三と申します。よろしくお願いいたします。私自身は20数年間、民間の総合商社に務めておりまして、10年前に県教委の民間人校長の全国公募で任用され、本県に勤務をしております。エネルギー電力・資源開発や事業経営に長く関わり、バーレーンを初めとして中近東やアジア地域での仕事が長く、そういった自身の経験を踏まえて、今日は色々ご意見を差し上げたいと思います。よろしくお願いいたします。



倉光恭三委員(仙台二華高等学校長)

司会(羽田) : ありがとうございます。7番清水委員お願いいたします。

清水委員 : こんにちは。東北大学の大学院文学研究科でドイツ文学を学んでおります清水と申します。普段は、ローベルト・ムージュというドイツの作家の勉強をしているんですけれども、何のためにその作家の勉強をしているのかとよく言われまして、自分でもよく分かりかねるまま勉強しております。最近いるのかいないのか良く分からないと話題の人文系の文学研究科の代表として、それらしい意見を言えたらなと思います。以上です。



清水翔太委員（文学研究科 DC1 年）

司会（羽田）：ありがとうございました。8 番弓野委員お願いいたします。

弓野委員：私は工学研究科の都市建築学専攻の博士課程 3 年の弓野と申します。よろしくお願いいたします。普段は都市環境の研究をしておりまして、その近年ヒートアイランド等で都市が遮熱化しているので、その人間に対する熱ストレスを緩和するためにはどのような対策を行ったらいいかっていうことを、CFD、流体シミュレーション等を使って、評価しているというような研究をしています。本日は、学生の立場から色々意見を言えればと思っております。よろしくお願いいたします。



弓野沙織委員（工学研究科 DC3 年）

司会（羽田）：ありがとうございます。関根委員、お願いいたします。

関根委員：農学研究科、修士 1 年の関根綾と申します。私は農学部の川渡フィールドセンターという東北大学の敷地の 95% を占めるというところからやって参りました。普段鳴子温泉の方に住んでおりまして、今日もちょっと硫黄の匂いがするかもしれないんですけども、そのフィールドの方で仕事をしている、附属の施設にいるという立場から少し意見が出来たらなというふうに思っております。よろしくお願いいたします。



関根綾委員（農学研究科 MC1 年）

司会（羽田）：ありがとうございます。王委員お願いいたします。

王委員：王と申します。今は経済学研究科ドクター 2 年生です。留学する前にデンソー中国で務めておりまして、2011 年に修士課程に入学しました。また、修士課程の一年目の後半から一年間、大学の交換留学プログラムでドイツの Paderborn 大学へ交換留学してきました。そして本研究科で修士課程を経て、今はドクターに進学しております。研究は自動車産業のサプライヤーチェーンマネ

ジメントの方を研究しております。かつ今は、母の身分で娘が本学校の附属保育園で大変お世話になっております。だから、外国人である身分で、母である身分で、今後どういうふうに人材を教育していくのか、少し意見をさせて頂ければと思います。よろしくお願いします。



王珊委員（経済学研究科 DC2 年）

司会（羽田）：ありがとうございました。最後にシリнда・クレワッタナクル委員お願いいたします。

シリнда委員：私は工学研究科のバイオロボティクス専攻から来ました。修士1年生。クレワッタナクル・シリндаと申します。自分は学部時代から東北大学卒業で、IMAC・U っていうグローバル30のプログラムの国際コースを卒業しました。留学生の立場で色々意見が頂けると思っていて、日本語はまだ完璧ではないんですけども、頑張ります。よろしくお願いします。



シリнда・クレワッタナクル委員（工学研究科 MC1 年）

司会（羽田）：ありがとうございました。この他の陪席で、機構の関係者が今おられます。名前と所属だけで結構ですので、23 人おられますので、一人3秒ぐらいで関内先生の方からざっと自己紹介をお願いいたします。

関内：関内でございます。よろしくお願いいたします。

関根：関根と申します。よろしくお願いします。

安藤：副機構長を担当しております安藤です。どうぞよろしくお願いいたします。

司会（羽田）：ポジションをちょっと何か言って頂ければ。どんな役割か、3秒で。

山口：グローバルラーニングセンター長の山口です。よろしくお願いします。

司会（羽田）：その後ろ、スプリングさんから。

スプリング：高度教養教育・学生支援機構のスプリングです。よろしくお願いします。

橘：同じく、その中の言語・文化教育センターで英語を担当しております橘と申します。よろしくお願いします。

金：同じところで韓国語を担当している金鉉哲と申します。よろしくお願いします。

藤本：同機構で体育を担当しております藤本と申します。よろしくお願いします。

杉本：同じく、機構で教育評価分析センターの副センター長をさせて頂いております杉本と申します。よろしくお願いします。

末松：同じく機構で、グローバルラーニングセンター副センター長を務めております末松と申します。よろしくお願いいたします。

芳賀：同じく機構でギリシャからインドの考古学、グローバル 30 でも教えております芳賀です。

足立：学習支援センター、センター員をしております足立佳菜と申します。よろしくお願いします。

司会（羽田）：後ろの列もどうぞ、永野さんから。

永野：教育・学生支援部学務課の永野です。よろしくお願いします。

安藤：事務方の学務課長をしております安藤と申

します。よろしくお願いします。

佐藤：教育・学生支援部長の佐藤と申します。よろしくお願いします。

渡邊：機構、グローバルラーニングセンターで国際学士コースプログラムのコーディネーターをしています渡邊と申します。よろしくお願いします。

水松：グローバルラーニングセンターで働いております水松と申します。

小田中：課外・ボランティア活動支援センター長をしております。本籍は経済学研究科の小田中でございます。

北：保健管理センターの北と申します。よろしくお願いします。

手代木：キャリア支援事務室の手代木と申します。よろしくお願いいたします。

志賀：教務課長の志賀と申します。よろしくお願いします。

司会（羽田）：ありがとうございました。あと沓澤さんと朱さんから色々とサポート頂いております。それでは、以上委員の紹介も終わりました、これから始めたいんですが、この組織は議長を委員の中から選ぶということになっております。それで、どなたか議長の立候補か推薦があれば承りたいんですがいかがでしょうか……。特になけ

れば、こちらでご推薦させて頂いてよろしいでしょうか。ありがとうございます。それでは、倉光委員に議長をお願いしたいんですけども、よろしいでしょうか。

倉光委員：はい。

司会（羽田）：ありがとうございます。それでは議長席に移って、以下は倉光先生の方で議事進行をよろしくお願いいたします。

議長（倉光）：ただ今議長役に仰せつかりました、仙台二華の倉光でございます。よろしくお願いいたします。それでは、議事の方を進めさせていただきます。進め方としましては、まず各委員の方からすでに意見書を頂いておりますので、これにつきまして、5分ぐらいを目途にご説明頂きたいと思います。その都度確認事項とか、あるいは質問等々ございましたら受け付けたいと思います。よろしくお願いいたします。それでは、まず中鉢委員の方からよろしくお願いいたします。

中鉢委員：意見書については資料が渡っていると思いますけれども、概して今の大学の改革というのはどちらかと言うと産業界のニーズを聞きすぎるところがあります。事務局資料に書いてあります6つのコンピテンス、協調性があって、専門力があって、コミュニケーションが良く分かっているなど、このような人を本当に育ててくれれば良いのですが、企業側からすると、必ずしもそういうことではありません。むしろ企業で教育する部分もありますし、社会が教育しなければいけない部分もあって、今こう力を入れて、大学が全て

を担うのかということは、少し考えてみた方がよいのではないかと思います。その中で、最低限考えなければいけないことは、世の中の仕組みや、国の仕組みといった全体を俯瞰的に見ること、あるいは自分の人生をどう考えるかということだけは、きちっと大学で教えて頂きたいと思います。自立した、社会人としての基本的な能力を身に付けてほしいなという気がいたします。そこからバックキャストしますと、大学の4年間ないし、あるいはその後続く5年間というのは、様々な観点から何を学ばなければいけないかということが、はっきりしてくるのではないかと思います。先ほど花輪先生からお話がありました、6つのキーコンピテンシーも、何らこれに反論するものではございません。そのような人材がいたら、ぜひ企業でも欲しいということになります。

議長（倉光）：ありがとうございます。今の中鉢委員の方から発言頂きましたけれども、これにつきまして何か確認とか、ご質問ありましたらお願いしたいと思いますが。はい、小笠原委員お願いします。

小笠原委員：意見発表については①、②の両方でしょうか。

議長（倉光）：そうですね、両方共お願いいたします。私も企業に勤めていましたから理解できるのですが、企業では1985年のプラザ合意で円高になって以降、一部の大企業ではどんどん海外に進出して、企業独自でグローバル人材というものを育ててきたわけです。しかしここに来て、政府や経済界が、グローバル、グローバルとその重要

性を声高に強調するのは、新興国の発展もあって、国際競争が大変厳しい状況にあって、グローバル社会に通用する人材を社会全体で育成し、世におくり出せる仕組み無くしては、日本の将来は大変厳しいものになるとの経済界の危機感がその背景にあります。王さんの意見書にも書いてあったと思うんですけども、中国などの新興国が発展し、国際競争が非常に激しくなり、一部の大企業だけでは人材の育成も限りがあり。だから社会全体で、育てていくということの中で、大学や高校など、教育の世界にもグローバル化の波が押し寄せて来ているのかなと思うんですね。そういう意味では、中鉢委員がおっしゃったように大学だけではなくて、やはり企業、会社、社会全体で取り組む必要がある。ただ日本は、企業の99%が中小企業ですから、大企業のように自前で人材を養成出来る体力のあるところばかりではなく、中小企業のニーズにも応えて、社会全体で、グローバル人材育成を行う必要があります、そういう意味では、大学や高校教育におけるグローバル人材育成の役割は大きいと思っています。この点について何かご意見はありませんか。

中鉢委員：今おっしゃった通りだと思うのですが私は民間企業にいた際、様々な大学から人を受け入れてきまして、東北大学の技術系の人が多かったのですが、色々なところで引いてしまうというか、もうひとつ前に出るところが足りないという気がしました。私もその一人なのかもしれませんが。東洋経済が大手上場企業の社長の出身大学のデータを出していましたが、東北大学はやはりあまり多くありませんでした。単科大学では、例えば一橋大学が多いということがありました。東京大

学も多いです。東北大学が、技術に優れているということは分かるのですが、例えばトムソン・ロイターの資料を見ても技術系、特にデバイス分野は非常に強いのですが、これがきちんと世の中で活躍しているかという、私は厳しく見なくてはいけないと感じております。

議長（倉光）：そうですね。私も海外事業部長をやっていた時、東北大出身の部下も何人かいましたけれども、やっぱり控えめで、一歩引きながら、自分を主張するところが少しもの足りないなというふうには思っていました。ただ我慢強いですし、どういう困難にも真正面から取り組みますし、そういう意味では非常に評価は高くはありました。それでは次に行きます。松本委員お願いします。

松本委員：よろしくお願いします。今、中鉢委員から産業界に阿り過ぎだというご発言がありましたが、私は阿っているというその表現は正しいと思います。むしろ上滑りなカタカナ言葉に踊らされているような気すらします。こちらの大学に限らず、全ての大学がグローバル人材、イノベーション人材という言葉に踊らされ過ぎていて、定義も定かではないこの言葉を使い過ぎているような気がします。それからもうひとつ、ケチを付けるつもりはありませんが、コンピテンシーという言葉に引っかかりを感じます。こういったカタカナ言葉で、教育というものを語るのは、もうやめた方がいいんじゃないかというふうに思っています。まず①、それを前提としておきながら、東北大学でどのような学生を育ててほしいかという期待について申し上げます。一言で言え

ばここに書いてある通り、次世代をきちんと育てられる社会人を輩出してもらいたい。その人がきちんとした力を持っているのは当たり前で、その人が次の世代を育てることが出来る、その力を伸ばしてやる事が出来る。そういった力を持った人をまず輩出してもらいたい。そういった人たちに必要なのはやはり構想力と実現力です。どのような社会を築きたいかということを中心に掲げ、それに向けて何をすべきなのかということを考える力。それを掲げた上で、戦略を立て戦術を練り、戦力を整えていく。そういった人たちを育ててもらいたいと思っています。これが、私が被災地の復興を担ってきた東北大学に一番望みたいことです。それからもうひとつ。教養教育として何を求めるかですが、これも①と関連します。社会観を持ってほしい、最低でも新聞を毎日読んでもらいたい。読売新聞じゃなくても構いません。構いませんが、やはり大学の現場を歩き、そして就活の現場取材する中で、どうしてもこういう学生が出てきてしまうだろうと愕然とすることがあります。就活を前にすると、突然新聞を読んで来るから、社会に対する関心や理解が非常に浅い。某経済紙を読めば、就活に強くなると思っているんだったらそれは大間違いで、それは経済界から見たこうあってほしいという知識ではあっても、20年後、30年後の社会を睨んだ、「あなたはこれからどう社会を築いていきたいか」という質問には答えられるような深さは持っていない。一体この人は大学で、大学院で何をしてきたんだらう。その前に、何を考えながら生きてきたんだらうということをして愕然としながら話を聞くことがあります。社会観がない若い人たちが往々にして陥るのは、根拠のない万能感、根拠

のない劣等感です。自分は素晴らしい。それは大切です。自尊心は大切だけれども、社会全体を見渡した上で、自分はその中で何者なのか。何をすべきなのか。それを考えるのが、教養教育の原点ではないかというふうに思っています。私は正直言うと、この高度教養教育というものが良く分かりません。一般的な教養教育というものの、正直言うと良く分かりません。ずいぶん色んな本を読んできましたが、なるほどこれが教養教育なのかというふうに合点がいったものは、今のところ私には見当たらない。でもひとつだけ言えるのは、今申し上げたように社会というものは、今どういうことになっていて、そしてその中で自分はどう生きていくのかということを考える。その足元におそらく教養教育というのがあるかと思います。グローバル人材という意味不明なカタカナ言葉ではなく、教養、しっかりとした社会観と、その中でどう生きていくのかということを考える人を育ててもらいたいというのが1点。それから、やはり平易な日本語で、自分が学んできたこと、自分の社会観を説明出来る人を育ててもらいたい。最後です。3年前に読売新聞で世論調査をしました。1,000人に対しての世論調査と大学の実力調査で、同じ質問をぶつけました。大学は社会の期待に答えているかという質問です。その中で、学長はほぼ100%社会の期待に答えていると回答しました。一方1,000人の世論調査のうち、社会の期待に答えているというふうに回答した方は、40%未満です。これは若いほど、つまり20代が一番社会の期待に答えていないというふうに回答した率が高かった。60代、70代の昔の大学教育を知っている人にとって、今の大学教育は非常に生ぬるいとか、不安があらうと回答すると思っ

ていたんですが、20代、つまり大学教育に近い方が不満が大きいというのは、何を意味しているのか。謙虚に受け止めなくてはいけないんじゃないだろうかと考えています。以上です。長くなつてすみません。

議長（倉光）：ありがとうございます。今の大学の教育に対して厳しいご意見が出ておりますけれども、これにつきまして何か大学側の方から、反論と言いますか。何かご意見ありましたら、お願いしたいと思うんですけれども。安藤先生、いかがでしょうか。



安藤委員：先ほど松本委員の方から厳しいお言葉を頂きました。ありがとうございます。教養教育のあり方として、どういうものが本当に教養教育として、その個人個人の心に響くのかというのは、多分個人の生き方に関わることではないかというふうに思っています。我々としては、これもひとつの考え方かと思うのですが、その教育の場として本人が学びたいと思ったものを、きちんとその場に提供するということが、大学教育、高等教育の場では非常に大事なことであるということと、その時に先ほど若い人の方が、期待に込めているかということに対してネガティブな答え

が多かったと。これはまだある意味では分かる気がいたしまして、まだ本人たちは自分たちがどう生きているか、どう人生を過ごせばいいかというものをやはり試行錯誤している中で、その中で、大学で学んだことを、どう生かせばいいかということをも多分考えているんだろうというふうに前向きに期待をしています。ただ、確かにこの学長と、一般からの40%未満というのはやっぱり乖離が大きいなと思います。ありがとうございます。

議長（倉光）：ありがとうございます。全員の委員のご意見をお聞きしたいと思いますので、次に進みます。小笠原委員お願いします。

小笠原委員：はい。よろしくお願いいたします。他の方に比べると、非常に私の文字は少なく、申し訳ありません。東北大学でどのような学生を育ててほしいかという期待感については、そこに記した通りでございます。前段には、今私がお会いしている嶺岸若夫会長さんという方のこと。それから、もう一方、この5月まで会長を務めていました野田もと子さんという方のことを紹介しております。おふたりの姿勢から私が感じ取ったことは、おふたりが積み上げてきた学びの中から大切にされて来られたことを、今の生き方に結び付けられているなということでございます。私も実は、昨年三月まで高校に勤めておりました。高校で、監査委員の方が学校に来られまして、色々やはり学校のことを尋ねられるんですね。ちゃんと校訓を、高校生たちに示しているか。その方のお話に、私も気付かされまして。そう言えば、校訓はあるなど。ただその校訓を、果たして私たちが生徒たちに日々説いているだろうか。今私たちが

行っている教育活動の原点は、全てこの校訓にあるのではないかということで、それから機会あるごとに生徒たちにはこの校訓を繰り返し、また校訓の持つ意味と、校訓が全ての教育活動に結び付いているということを説明し続けてきました。その結果、やはり生徒たちは、この学校で学んでいる意味はここなんだと、自分たちが学んでいる高校に誇りを持つことはここなんだということを感じ取ってくれ、日々の学習活動、あるいはそれぞれの課外活動に直結していった印象を強く感じた次第です。ですから、東北大学におきましても研究第一、門戸開放、実学尊重という理念がございします。この建学の精神をぜひ、なかなかたくさんの学生さんがいらっしゃるわけですが、あらゆる機会を見つけて伝えていく。東北大学はこういう人材を私たちは育てていきたいんだということを、先生方お一人お一人が、学生の方々と真剣に向き合いながらお話していくということが、大事なのかなと感じているところでございします。それから②の教養教育として何を求めるかというところですが、そこに文科省の資料をひとつ引用させて頂きました。文科省の教養教育に対して何を求めているかという理念こそ、私は学ぶ意欲に火を付けて、将来に生きがいを見出すことにつながると考えているということです。今、知識の習得、活用、さらに知りたい、学びたいという探究心につなげて、それがスパイラルのようにどんどん伸びていく力を養うことが、教養教育の果たす役割ではないかと考えております。それが学びの連続性と、知の総合が結実して、一人一人が生涯に渡り学び続ける意欲を持ち、豊かな人生を築き上げていくことにつながるのではないかと。これこそが、教養教育だと私自身は捉えてお

ります。私は、生徒指導の問題が多発する高校に勤めていたこともございます。授業を飛び出していく生徒もおります。あるいは、今朝の髪型が気に入らなかったからと言って、学校に来ない生徒もおります。あいつはどうしているんだと教室に来ている生徒に聞いたら、先生知らないの。今日あの、とあるパチンコ屋の開店日だと。そんなことを平気で言う生徒もいました。ただ接していくと、こちらが本当に突き放さないで粘り強く接していくと、実は根底には俺たちも学びたい。私たちも学びたい。その学んだことを役に立てて、人の役に立ちたいということが伝わってくるんですね。それはどの高校であれ、あるいは大学に行った方であれ、行かなかった方であれ、同じ気持ちがあるんじゃないかと思います。ぜひそういう学び続けたい、あるいは学びたいという心に火を付けていく。これを教養教育の中で培って頂ければと考えているところです。長くなりました。

議長（倉光）：ありがとうございます。後先になってしまいましたが、全体のスケジュールをご説明しますと、3時10分まで、各委員の皆さんに意見を発表して頂きまして、10分間休憩の後、3時20分から1時間を取りまして、さらに意見交換をこの委員の中でやっていきたいと思っております。よろしくお願いします。それでは続きまして、渡邊先生よろしくお願いします。

渡邊委員：仙台二高の渡邊でございます。この①の「東北大学にどのような学生を育ててほしいか」、②の「教養教育として何を求めるか」に入る前に、今日はお集まりになったスタッフの方々

を見て、本当に大学というのは人的なスタッフに恵まれているなというのを痛感した次第であります。ぜひ頑張って頂ければというふうに思います。それからもうひとつは、先ほど企業との関連で社会のためにとか、企業のためにとというようなことについての話題がありましたけれども、大学に限らず教育の目的は、それとかなり重なると思うんですけれども、やはり個人がどういうふうに豊かな人生を送っていくかということも、これまた大事な視点ではないかというふうに考えております。それでは、いよいよ本題に入って①のどのような学生を育ててほしいかということですが、そこに書いた通りです。それから私が現在勤めている学校も、距離的にもかなり近くて卒業生もだいぶ来ておりまして、ここで言ったことは、そのまま自分に返ってくるわけですし、でもそういうことを言っていると何も話せませんので、いったん脇に置かせてもらって、勝手なことを言わせて頂ければというふうに思います。一言で言うと「骨太な人材」ということだと思うんですよね。そしてそれは②の方とも関連しますけれども、用意された資料の中にあるように、貴大学の方で構想された①の専門力から、⑥のリーダーシップ力のそれらをトータルで集めたものがそうだろうというふうに思いますので、進むべき方向っていうのは、分かっているのかなという感じがします。ただ、問題はそれをどういうふうに具体的、個別的に達成していくかっていうことが案外難しいのかなと。本当にその点では、私も日々悩んでいるというところがございます。あとはちょっと気付いたことをいくつか、個人的な経験も含めて書きました。やはり東北大学に限らないんですけれども、コミュニケーション力というのが不足して

いる学生さんについてちょっと心配だなという部分はあります。それではその次に、②の教養教育として何を求めるかということですが、やはり学び続ける姿勢、それを可能にする学習方法の確立を支援するような教育が大事なんじゃないかというふうに思います。高校の時どういふような授業を受けたかったかということをして大学生に聞いたことがあるんですけれども、自分で調べて論を組み立てて、意見を発表するようなことと書いてきた学生さんが結構多かったんです。もちろん、高校の方もだいぶそういうふうに変りつつあると思うんですけれども。意識的、意識付けというか、やはり内発的な学習意欲をどういふふうに付けさせるか。さっきの話と重なるので、すけれども、やはりそれが課題かなというふうに考えております。それから、①から⑥に挙げられている専門力から、⑥で挙げられているリーダーシップ力。本当にみんな大切なんですけれども、その中でも特に鳥瞰力ですね。ぐっと引いて、全体を見通す力って言うんですかね。それはとても大事だというふうに思います。先ほどの松本委員の根拠のない万能感、あるいは劣等感というものもその辺の力の少なさとか、その辺の視点がもう少しあれば何とかなる部分もあるんじゃないかとは思っております。それにつきましても、特に鳥瞰力を育成するためにも、先ほどの花輪先生からのお話などは、学生さんにも1回お話しされたらどうなのでしょう。つまり、そうすることによって学生さんたちも自分の置かれている状況というか、全体が分かって、その中で自分はどういうふうにしていくという、そういうヒントになるんじゃないかということをやちょっと感じたところでした。以上でございます。

議長（倉光）：ありがとうございます。今、コミュニケーション能力っていうのが出ましたけれども、コミュニケーション能力につきましては、多くの委員さんからも指摘されているところです。あとは大学的意欲という意味では、小笠原先生とも通じるところがあるのかなと思います。それでは次は私の番ですが。私は、学生の国際標準化というところを掲げております。高校には、確かな学力ということで知識や技能を確実に定着させて、それを用いて表現力、思考力、判断力を備えることが大切で、学校も様々な取り組みをおこなっているところです。私はこれを大学で、グローバルな世界で通用する知識、表現力、思考力、判断力を育成していくことが大事なのかなと思います。つまり、グローバル標準の課題解決能力ということですね。最初に行うべきことは、今現在の問題も踏まえて、どういう姿、どういう組織、どういう状況があるべき姿なのかというところを構想することです。先ほど松本委員さんの方からありましたように、あるべき姿を構想することです。あるべき姿を構想するというのが非常に難しく、民間ではプロのコンサルタントの仕事になります。同じ問題であっても人、組織、企業において、そのあるべき姿っていうのは当然変わってきます。そして、あるべき姿と現状とのギャップが課題であって、その課題を発見、発掘しそれを解決するための手段を選択し、実行していくところが大事なところです。それをグローバルな舞台でもできるようになってほしいのです。現在、国際間では様々な問題があり、その利害が競合し、錯綜しています。そういう錯綜する利害を調整して、オーガナイズしながらまとめていく力

が、日本人に求められているところではないのかと思っております。また東北大が目指す「グローバルリーダー」ですが、これは目的なのか、目標なのかというところをお聞きしたいです。目的というのは、最終的に到達したいところで、目標っていうのはそれに至る通過点、目的に至る条件と考えられます。グローバルリーダーになること自体が目的ではないはずで、東北大学が目指すグローバルリーダーに到達した後に、そのグローバルリーダーが社会の発展にどのような貢献、活躍ができるのかをこの展望に求めたいのです。先ほど松本委員の方からありましたが、6つのコンピテンシーが並列的に並んでいるわけですが、これは構造化、階層化して、6つのコンピテンシーの持つ意味、有機的な相互関係、バランスを理解するために、このように階層化してみました。次に本校もSGHの指定をうけていますが、素晴らしいSGHの課題研究をしている高校は全国でいくつもあります。そういったところが東北大学の高度教養教育と接続・連携し、さらなる発展、高度化できる仕組みを作ってほしいと願っています。筑波大学の教養教育の改革の中でも、教員が高校への出前授業を繰り返して、ヘッドハンティング、学生、高校生を一本釣りし大学に連れてくるというような取り組みをしていると聞いていますが、大学は「待ちの姿勢」ではなくて、高校現場に積極的に入って、ずば抜けて優秀な人材をヘッドハンティングしていくような人材への個別的・積極的なアプローチも必要ではないかと思っております。最後に、社会人基礎力養成プログラムを活用して企業家育成を支援することはできないものか。大学には遊休の豊富な研究資産（特許など）があるわけですので、そういった遊休の資産を掘り起こ

し、企業家を目指す学生に提供し、産学官連携し、ビジネスとして具体化できる仕組みづくりが出来ないものか。

では、次に学生さんの方からも、積極的なご意見をよろしくお願ひしたいと思います。それでは、院生の清水さんの方からよろしくお願ひします。



清水委員：この①のどのような学生を育ててほしいかという問いかけにはとても答えるのに苦労いたしました。そもそも僕が今学生のままでし、そういうことで自分がどのような人材になっていきたいかなというようなことを考えていたんですけども、色々莫大なお金が欲しいとか、名声が欲しいとか色々あるんですけども、それは置いておいて、とりあえず幸せになれたらなと思うんですね。やっぱり他の学生にも幸せになってほしいということで。渡邊委員も先ほどおっしゃっていましたが、個々人の幸せといったものをやっぱり一番に置くことは出来ないかなというような気はしています。ただ、やっぱりなぜ良い企業に入らなくてはいけないのかだったり、なぜグローバルの波に乗らなくてはいけないのかとか。なぜ成長していなくてはいらないのか。なぜ人は生きるのかみたいな。そういった、最後の方は冗談でしかないんですけども、そういう冗

談みたいなことを冗談抜きで考えて行かなくてはな、というような気がします。ただやっぱりそのグローバル化の波に乗って、良い人材を作るというようなことも、もちろん個々人の幸せに反するかというとなんなことは全くなく、合致するところが多いと思います。そういう時にやっぱり大事なのは、先ほども少し話題に上がっていましたが、そのアピール力といったものが大事なのかなというような気がします。それとはもう少し別に、やっぱり周りを見ていますと個々人の幸せという点で、周りを見ていきますと、どうにも途中で大学を辞めてしまう人でしたり、授業に出て来なくなってしまう人でしたり、そういった問題を抱えている人が、わりかし文学部だったからなのかもしれないですけども、多いような気がします。この里見ビジョンの重点戦略3番の、学生支援の充実強化。この辺りも割と考えていてほしいなという気がいたします。やっぱり学生のメンタルケアと言いますか、そういったものは配属された研究室に任されている感があるんですけども、やはり、指導教員だけではどうしても乗り越えられないラインみたいなものがあったりして、そこを少し保護者であったり、また医療的なケアと言いますか、そういったものと連携が良く取れるようになったらなというような気がいたします。そして②なんですけれども、教養教育ということで。ここにいる学生の皆さんは、いわゆるゆとり教育の世代だと思うんですけども、やはりそのゆとり教育はすごく批判にさらされてきたというか、そのような風当たりの強い世代だったと思うんですけども、なぜゆとり教育が批判されたのかということを考えるに、どうもその教養教育の内容の薄さというか、理念とや

っていることの合わなさみたいなものがあつたような気がするような気がします。ではどうすればいいのかということで、それは僕もよく分からないんですけれども、本物と言いますか、うわつぱりをなぞるだけではなくて、本当の教育。研究者がどのような研究をしているのか、といったような技と言いますか、理念と言ったものをなるべく近いところで体験するということが大事なのかなというような気がします。やっぱりその教養教育と言いますと、何かとりあえず外国人教師を呼んで、ネイティブな発音をとか、他にも実際にフィールドワークでといったような、そういった本物に触れるという形もあるんですけれども、果たしてその本当に本物がそのフィールドワークではあったり、ネイティブな教員だったりというところから、エッセンスをちゃんと受け取れているのかというところにちょっと疑問があつたりして。少しもったいないなというような気がしていました。それと最近授業で、とても昔気質と言いますか、来週までにこれだけ原書で読んできて、そしてそれを全部訳して、それを発表するみたいな、そういうきつい授業と言うんですかね。やっぱりそういう授業が一番役に立つと言いますか、スキルを上げていく上では、今まで役に立っていたなというような気がします。やっぱりそういう授業はとても人気がなく。自分一人しかいないなんてことはよくあるんですけれども、ただやっぱりそういう授業でしか身に付けられない力って言うのは確実にありまして、それこそそのキーコンピテンシーと言いますか、そのそういった問題解決能力、設定能力なんかも、とても育ててくれるような気がするんですよ。ただそればっかりだと本当に人気がなくなって、東北大

学に人が来なくなってしまうので、それこそ本当に面白いだけの授業みたいなものもあっていいと思うんです。ただ、やっぱりその授業を、選択の余地を残すというか、多様性みたいなものが教養教育の場においても大事なのかなというような気がしました。以上です。どうもありがとうございます。

議長（倉光）：ありがとうございます。清水委員のところでは、文学部の原典に当たれ、本物に触れろというところが非常に印象的なんですけれども、これは中鉢委員の方からも本物の講義、面白い講義っていうのは触れられていますけれども、何か今のことについてコメントがありましたら。

中鉢委員：今、教養の面白さ、なぜ学ぶかとか、なぜ生きるかというようなお話がありましたけれども、私が東北大学で学んでいた頃は、なぜ生きるか、なぜ学ぶかを毎日のように議論していました。なぜなら、学生運動が盛んで休校が多く、講義が少なかったからです。好む、好まざるに関わらず、毎日議論していたわけです。これを論破出来ない、学校に行く資格がないという考えがあり、理論武装が必要で、否が応でも何も考えていない人間は排除されるような力が働いていたのです。だから、ある意味では、大変恵まれていた世代だったのかもしれませんが。私の場合は、そのような色々な勉強というのは自分でやっていたわけです。本を読むことが多かったですが、清水委員もそうだと思いますけれども、本当の研究というのは、たいがいは先生の教えがなくても自分一人でやることのできるのです。ところが、そ

のことが正しいかどうかというのは、やはり大学に行き、友達と議論しなくては分からないというところがあります。そこが原点のような気がします。専門学部になると、指導教員の指導などはほとんど受けません。結局は自分でやり、たいがいのことは自分で学べるのですが、そこで学べないことが何なのかということを、きちんと教養のところで教えなくてはならないと思います。さらにもうひとつ付け加えると、教養の先生というのは何となく高校の延長線上のような感じもあり、例えば私は工学部の際に日本史を勉強したくて講義も取りました。法学の講義も取りました。しかし、講義でやった日本史というのは、ずっと6ヶ月間西郷隆盛のことばかりでした。これで日本史を学んだということになるのか疑問です。また、法学の講義は、日本の首吊りの絞首刑の構造を学ぶことだったのです。これは何だったのだろうかと思います。さらに、漢文も面白いと思い講義を取っていましたが、朗々と漢詩を読むだけでした。それよりも漢文の本当の面白さや、日本の法というのはどういうものか、例えば人を殺してはいけないとか、罰則はこういうものだとか、教えてくれる先生は、残念ながらいませんでした。このようなことは社会で学んだという感じがします。教養の先生方も、面白いあるいは本物と私は意見書に書きましたが、講義をこなすのではなく、きちんと取り組んでほしいと思います。

議長（倉光）：ありがとうございます。それでは次に行きます。弓野委員、お願いします。

弓野委員：ちょっと私は今までの皆さんの議論から外れてしまうかもしれないのですが、今自分が

学生としてやっていると同時に、私は今もう博士課程の3年なので、修士とか学部の4年生の論文指導なんかにも当たっていて、ちょっと半分教育の方にも携わっているようなところがありまして、そこで、こういう力がなっているのを感じているのは、論文とか書く時の、その論理的な文章の構成力であったり、その論理的な文章を書くための論理的な思考力っていうものが、ちょっと足りないんじゃないかなというのが、思うことがあります。それを実際、その大学の外の方とお話している時に、今は会社に入ってくる若い人はそういう力が足りないんだよねというふうなことを言われているのを聞いて、確かにそうだなというふうに思いまして。その論理的な文章を書く時に、どういう力がいるのかなと私なりに考えると、例えば論文でしたら書き込まなければいけない情報の中でも、すごくゼネラルなところと、すごい細かいところだとか、そういう情報を階層化して、ここまでは乗せなくていいなとか、これは絶対にあった方がいいという取捨選択をして、それを分かりやすく伝えるためにはどういう順序でしゃべっていくといいのかとか。そういうことを考える力が足りない学生が多い気がするんですね。こういう力が今、自分もその学部の頃から博士課程になるまで、論理構成力みたいなものは段々鍛えられてきた気がするので、そういう力が鍛えられた後の方が、やっぱり色んなことに役立つんですよね。その研究の計画を立てることにも役に立ちますし、あとは海外の人に対して研究の発表をする時も、そういう論理的な構成がしっかりしていれば、英語が多少へたくそでも伝わるといような経験もしましたし。というところで、その論理的な文章力であるとか、思考力っていう

ことがあることで、ここで東北大学で掲げている目標であるとか、そういうところを養うためのその素地が出来るんじゃないかなというふうに思いまして、私はそういう力を持った学生を育てることが大事なんじゃないのかなというふうに考えております。②として、教養教育として何をするかという話なんですけれども、自分の学部学生からの受けてきた教育を考えて、現在の教養教育ではその力をつかないんじゃないかなというふうに思っています。その専門教育以外の授業が、もし教養教育だとすると、私が学部 1、2 年生の頃というのは、レポートは色々な授業で課されていたんですけれども、そのレポートに対する具体的なフィードバックっていうのはほとんど存在しておりませんで、基本的に学期末にレポートを課されて提出して、その後ネットの学務情報システムみたいなものを見ると成績が出ているっていうところなので、そのレポートのどの部分がうまく書けていて、書けていなくてみたいなのが全然分からないんですね。なので、おそらく先生の方もすごい分かりにくい文章だったとして、多分内容がすごい間違ったことが書いていない限りは単位を落とすこともないので、専門知識を勉強するっていうきっかけにはなっていると思うんですけれども、論理的に文章を組み立てるっていう勉強には、おそらくほとんどなっていなかったのかなというふうに思います。私が論理的な文章を書くことを意識し始めたのは、専門科目が始まってからで、専門科目になりますと授業によっては担当教員の方がすごく熱心で、毎回レポートを課して、それをその研究室の学生の TA さんが、コメント等を入れてくれて、ここはすごく良く書けているねとか、ここはもうちょっ

とこういうふうにした方がよいというようなフィードバックをくれて、そうするとこういう書き方は良くないんだとか、これはこういうふうにと書くと、人が読みやすいんだというのを意識するようになって。そうすると毎回問題意識を持って、そういう文章を書くことが出来ました。また、一番今ここまでで、頭が整理されるのに役に立ったと思うのは、やはり研究室に配属されてから、卒業論文や学会に投稿する論文を担当教員の先生に何度も添削してもらって、それがどうすれば読み手に誤解なく伝わるかというのを締め切りぎりぎりまで何度も検討するというその作業がとても大きいなと思っています。こういうことをやっている過程で、自分がその課題に対してどういうふうに考えているとか、そういうこともすごく頭が整理され、論理的な思考力も上がったのかなというふうに感じております。なので、教養教育でその研究室で研究論文を書くほどの、そういう指導はちょっと難しいかもしれないんですが、そういう文章の構成の仕方を教えるとか、そういう論文を書くことを主体にした授業みたいなものがあってもいいのかなと。そういうことに対して、フィードバックがあるような授業があればいいんじゃないのかなというふうに私は考えておりました。すみません、長くなりましたが以上です。

議長（倉光）：ありがとうございます。論文の書き方、専門的な知識を平易な言葉でっていうのは、松本委員の意見書にもありましたけれども、何かそれについて一言、ありましたら。

松本委員：今弓野委員がおっしゃられたことは、

とても重要なことだと思います。今年の大学の実力調査の中で、「課題を添削して、学生に返すように大学として教員に促しているか」、というふうに聞きましたところ、46%がやっていると答えました。大学は教員に「促している」、でも実際はどうでしょうか。いま、学生に「主体的に学ぶ」よう求めています。でも、アクティブラーニングというからには学生だけが学ぶものではなく、教員も打ち返すというのが、不可欠なのではないでしょうか。アクティブラーニングには双方向性が大切だと思います。弓野委員がおっしゃるように、お互いキャッチボールが出来ないと、おそらく教育というものは成り立たないんだろうなと。基本的なことを見落とさないでいればいいのかなと改めて思います。

議長（倉光）：ありがとうございます。それでは次行きます。関根委員、お願いします。

関根委員：グローバル化がよく言われるんですが、私はあまりピンと来ていない部分もあるのと、東北大学は東北出身の学生が多いんで、地元にごく愛着を持って、地元に戻りたいという方も非常に多いと思っています。私自身も地元が福島というのもありまして、地元に戻って復興を強力にバックアップしたいというふうな気持ちがあります。国際化っていうのは、その海外に出て働くとか、東京の大きい会社に行って働くということだけではなくて、地方にいながらその発展のために海外と交渉していくとか、貿易につながっていくというような方法もあるんじゃないかなというふうに思っていて、そういうふうな意味では、東北地区にあるという利点、他の大学では出来な

いという部分が、そこにはあるというふうに思っていますので、公務員になりたいという人は結構多いんですけども、インターン、公官庁へのインターンの数がちょっと少ないような気がしています。もっとそういう地方とのパイプといいですか、就職に関してもパイプを作れるようなものがあつたらもっと学生は喜ぶのかなと。就活に対する意識も上がってくるのかなというふうには思っています。その際にはもちろん、英語力ですとかコミュニケーション力というものも、とても大事になってくるので、それはそのまま自分にブーメランで返ってくるもので、やらなくてはいけないというふうに思っているところです。少し話は変わって、教養教育ですが、内容というよりも形態に関してなんですけれども、私はさっきお話ししたように、川渡のセンターにあります。それで、前期は週 2、3 回講義がありましたので、片道 2 時間かけて通っていました。前期は。でももちろんガソリン代が出るわけでもないですし、友達と乗り合わせたりしながら朝早く起きて来て、1 時間ぐらい授業を受けて帰るなんてこともありました。そういった時に、なかなか研究との両立というか、実験も結構時間を取るものがありますので、なかなか思うように進まないなというふうに思っていました。そういった時に Skype とか、実際に講義室に行かなくてもそこで受けられるような制度があると、少なからずそういう学生はいるので嬉しいのかなというふうに思っています。その研究室を選ぶ時に、遠いとか、車で講義に行かなくてはいけないというようなことで、私たちの研究室に来ることを諦めてしまう学生も非常に多いので、その選択の幅が広がるという意味でも、そういうのを取り入れて頂けると嬉しいのか

なというふうに思っています。あとは少し話はそれますが、最近研究者倫理というものが話題に上がることが多くなっています、世間の風当たりと言いますか、目も厳しくなっているところであります。学年、大学院の講義で生命倫理学という講義があるんですけれども、研究室に配属されてしまってからでは、やっぱり技術研究者の目というか、科学者の方からしか視点が狭くなってしまっているような気がするのです、もっと早い段階で学部の内から、特に理系の学生は、大学院に進む学生が多いですので、社会を見渡すというお話が今までも出ていますけれども、そういったことと合わせて倫理観というか、社会の現状と今自分がやりたいことのマッチングっていうのを考えていく必要があるかなというふうに思っています。以上です。

議長（倉光）：はい、分かりました。今の遠隔地での講義とか、倫理の問題につきましては、後ほど後半戦で、最初に羽田先生の方からご説明頂きたいと思います。ここは時間の関係で、次に進みます。王委員、お願いします。

王委員：そうですね、留学してきて本当に色々ショックなことも感じていましたし、感動したことも色々経験しましたし、ありがたいです。先ほど自己紹介の中にもう1点漏らしたことがありまして、それは修士課程の時に、本校のおかげでドイツにも1年間交換留学をしてきました。そのおかげで、何というかちゃんと先進国、日本とドイツの教育の差を感じてきました。確かに、両国の教育レベルは中国よりはるかに高いんですけれども、日本とドイツの教育を比べてみると、やっぱ

り何か物足りないというのは実感しておりました。それで、取り上げたいところはふたつあって、まずは1点目のところ。英語教育のレベルです。それは日本はもちろん色々やっていますが、大学の方は今、東北大学はちょっと言葉が厳しくなりますけれども、現在でも、外国人の留学生を受け入れるのはTOEICというシステム。あとは留学させる方もTOEICとかTOEFL-ITPというシステムで評価するのは、本当に甘いという感じだと思います。今の、欧米大学の制度を見ると、ほとんどTOEFLとIELTS、それよりもっとレベルの高い国際、みんな認識されている制度で選択しています。それはひとつ目です。ふたつ目。もし、英語教育は個人の知識の能力だとすると、2番目はどういう教育を求めるかというのは、私自分の時間というか、ふたつを取り上げたいんです。ひとつはやっぱり日本の文化。日本の文化はほとんど国際的には認められて、マナーが高い、良いマナーというふうにはみんな思われています。ただし、やっぱりある部分は、例えば恥の文化。恥ずかしいという文化は、多分日本が一番、深く意識しています。私の娘もここ3歳から保育して頂いて、そして何だか最近急に、ママこれ恥ずかしいとか言っていて、これは何なんだというのを感じたし、あとはドイツの時は、何かのきっかけで私はちょっと恥ずかしいと思った時はドイツ人に言われました。私たちはそういう恥ずかしい文化はないですよ。ちゃんと言えいいですよ。それがまずひとつのショックでした。おそらく、日本の学生さんたちは、みんなの前で英語でネイティブの発音じゃないと恥ずかしく言えないのも、英語力と関わるかなと、ひとつは感じております。私が外国人で、決して日本語は全部

正しいではないんですけれども、でもちゃんとそういう言葉というツールを通して、みんな自分の意思を伝えるのはもっと大事ではないかと思います。2 番目は、やっぱり日本の文化で、みんな頑張れば何とかなる。頑張るということはみんな高く評価される。それもドイツに行った時は、すごく評価されました。日本だけではなくて、アジア人という扱いで、もうアジア人はいつも朝から晩まで勉強している。それは何なんだよ。本当に朝から晩まで何というか勉強出来るのか。頭はそういうことを全部学ぶことは出来るのかという質問をされ、確かになんかということを感じて。ドイツの大学は、図書館。朝先取りで席を取ることで、朝おそらく 8 時頃にもう図書館の椅子とか全部取られてしまって、だけれども一生懸命勉強して、午後の 5 時とか 6 時になると、もう学生さんはほとんど全部帰ってしまった。それで残されたのは、もう大体アジアのフェイスで、分かるようになっていて。だから勉強だけでは良いことではないというのは、欧米人はそういうふうに思っているかというのも、もうひとつのショック。だから、何が言いたいかというと、やっぱり国際的な文化。日本国内だけで認められているマナーではなくて、みんなこういうふうに高く評価していることを学生さんたちに伝えていかないと、多分日本国内だけで育てられている日本人の学生たちは、それを認識出来ないです。そうしたら、もしグローバル人材という場合、海外、国際的な場面に出る場合は必ずそういう目にあうから、だから大学教育の時から、ちゃんとそういう教育もしていた方がいいのではないかというふたつの意見です。長くなりましてすみません。ありがとうございます。

議長（倉光）：ありがとうございます。適用されている基準が低いということですよね。

TOEIC ではなくて TOEFL を使うべきだと。それにつきましては、また後ほど大学の方からご説明頂きたいと思います。国際マナー、国際基準ということで、これは私の意見とも通ずるんですけれども、やっぱり国際標準、国際基準の社会人、学生というのは非常にこれから世界で戦うには必要なと私も思っています。ありがとうございます。それでは最後ですけれども、シリンド委員よろしくお願いします。

シリンド委員：まず、①の方から説明させて頂きます。東北大学にどのような学生を育ててほしいかということで、企業や社会に出たら使える人間って書いたんですけれども、これは学部で、工学部だと 1 年生から 3 年生でもう全ての講義が終わって、4 年生になってから研究室にずっといて、卒業研究に向けて研究を始めたんですけれども、そのところでももちろん、3 年間の部分の学んだ式を利用して研究を進めるという感じですがけれども、でもやっぱり学部で学んだ授業とかは、理論とかセオリーだけを勉強したので、どうやって応用すれば、このイクエーションとかがあって、どうやって使えばいいかと。実際に使い方が良く分からないです。役に立たないというか、使い方が良く分からなくてなかなか進めないこととかも、自分だけではなくて、みんなよくこういうことを言っていました。ですので、講義の中で、理論は基礎的な部分で理解をして。その後にその理論を使って、どうやって使えばいいか、どうやって応用すればいいかの部分を増やしてほしいと思います。また、先ほど関根委員もおっしゃいました

けれども、大学院の方は倫理の講義があったのですが、学部段階はなくて。この部分も、学部のうちから初めてほしいと思っております。研究とかの倫理だけではなくて、試験とかも時々カンニングとかの、そういう事件もまだたまに起こっているのもっと学生が倫理観を持ってほしいと思っています。最後の方は自分の、外国人の立場からなんですけれども。良くあることは、日本人と留学生、外国人の学生が、見えない壁みたいなものがある。存在があると良く感じています。その壁ってというか、例えば研究室の中では私の研究室は結構留学生が多かったんですけれども、でもやっぱり友達とか、よくしゃべっているのは日本人は日本人のグループ内で、留学生は留学生のグループがあるという感じで。理由はなぜなのかと考えてみたら、もちろん留学生なんですけれども、日本人と一緒にグループでご飯に行ったり、色々お話をしていたり、それもあったんですけれども、自分もこっちの方なんですけれども、日本人とよくお話ししている留学生をよく考えたら、それは大体、日本語が出来る留学生だけです。短期留学生とか、日本に来たばかりの英語しかしゃべれない、日本語が分からない留学生が別々にされて、日本人があまり話かけに行かないみたいな感じで。時々日本人に聞いたこともあるんですけれども、あまり英語をしゃべれないから、話したくない、怖いとか、ちゃんと伝えられるかどうか緊張していたりとか、出来るだけ使わなくてもいいなら英語を言わない、みたいな。自分が両方言えるから、留学生と日本人の通訳というか、よくやっているんですけれども。学部の時から大学に、日本人が英語が完璧ではなくても頑張っってしゃべってほしいと思っています。自分も日本語は完璧ではな

いんですけれども、毎日日本語を使っているのに、もちろん間違った日本語も使っていて。間違っている部分があったら、友達とか同期からも言われて、こういう使い方は間違っているよと、こうやって言う方がいいよ、これは正しいとか言えるから、それを何回も言われたから、どんどん1年前とかより、日本語がうまくなっているのも、日本人にもそうやって英語を最初は全くしゃべれなくても、1年間とかたってから、絶対うまくなると思いますので、そうやって恥ずかしがらずに英語をしゃべってほしいと思います。②の方ですけれども、ちょっと短いんですけれども、この質問が答えづらいというか、自分も教養教育とは何かが分かりづらいので。でも自分の理解では、学生に専門だけではなくて色々なことを幅広い知識を身に付けて、それは理系の学生だとしても、文系の授業とか歴史とか、経済とか。色々知らなくてはいけないので、それを勉強するための教育と思っています。短いですが、以上となります。

議長（倉光）：ありがとうございます。それでは一応前半の時間になりましたので、ここでいったん休憩に入りますけれども、後半の最初に先ほどの学部生、院生の委員から出て来ました質問事項について、大学から答えられる範囲で答えて頂くところからスタートし、後半は1時間ほどですので、その間で私もまとめる方法を考える上で、各委員から、これだけは東北大に言っておきたいこと、要請したいところを、①、②それぞれひとつ、ふたつぐらいに絞ってお話頂くのと、学生さんからはこれだけは大学の方にぜひお願いしたいところをひとつかふたつぐらい、①番、②番についてお話頂ければと思います。60分の中でや

っていきますので、その時間の中でひとつよろしくご協力の方をお願いしたいと思います。それでは 10 分間休憩に入りますので、15 時 20 分からスタートさせていただきます。よろしくお願いします。

質疑応答

議長（倉光）：時間になりましたので、始めさせて頂きたいと思います。それでは最初に、学生委員の方から出ましたポイントにつきまして、大学側からお話頂きたいと思います。まず弓野委員から出ました、文章の構成の仕方を教える授業や、分かりやすい論文を書くこと自体を主体とした授業についてはどうですかという点ですが、これはいかがでしょうか。

花輪：個々の授業の中でどういうふうにレポートをまとめるか、あるいはどういうふうに論文を書くかというのは、やっております。特に理科総合実験という実験がありまして、その中では割合丁寧にレポートの書き方を指導はしています。なおかつ授業の中で足りないところは、スチューデントラーニングアドバイザー、いわゆるピアサポート、学生さんですね。ちょっと先輩の学生さんに SLA と略しておりますけれども、それになってもらって、レポートの書き方を指導しているというのは、ここ 1 年の間ですけれどもやりまして、非常に多くの学生が利用しています。関根先生、説明お願い出来ますか。



関根：関根と申します。私は自然科学の分野の担当をしております、今ご紹介のありました自然科学総合実験という、1 年生、初年次向けの理科実験の担当を主にしております。自然科学総合実験にも 2 種類ありまして、ひとつは 1,700 名の学生が 12 回の実験を受講し、それぞれレポートを出し、評価し応答するというものです。今、全体的に弓野委員がおっしゃったようなレベルまで行くには、その途中の時間的な位置づけが必要です。例えば、1 年生が実験を受ける前に、それまでには(高校では)こういう実験やレポート執筆の経験がありますかという質問をします。そうしますと、ほとんどの方はレポートを書いたことがないという回答をされるので、それをふまえた体制で始めます。すなわち、最初はどういうことをやっていったらいいのかというふうに、我々は考えるのです。授業を受講していくと、一応分かりやすいレポートの形式などをだいたい分かってくれるわけです。また、時間の経過とともに段々と学生さんは成長していきます。学部をとおして大学院にまでたどりつけば、私自身もそうなんですけれども今自分の修士の学生と、弓野委員のおっしゃったようなやり取りをしているのです。すなわち、研究室に配属になると、学生さんや大学院

生さんに対する研究室の先生の指導が、非常に丁寧になります。そうしますと、先ほど弓野委員のおっしゃったように、これは確かに役立っているんだな、これでこういうふうに表示しようとした時には、こういうふうに来るんだなというのを学生さん達が直に実感出来るようになるわけです。先ほど言ったように、高校の時にはその経験がないので、大学の初年次でどういう経験をし、どこまでを目標とするかを最初に設けておきます。その内容は大学院レベルまで突然持ってくることは無理ですので、その目標をちゃんと定めて経験して頂く。それから段々と成長していったところで、主に大学院レベルになりますけれども、外との接触、すなわち学会や研究会を通して外からの意見も踏まえていくようになります。だんだん裾野が広がっていき、自分の研究を見つめることができることになるのです。そういう成長のシステムの中における初年次の位置づけが重要だろうと私は思っています。自分の研究室の学生さんもなかなか文章を書くことは大変なようで、これは自分自身でも自覚するところですが、どこまで書くか、どの目標まで書くかというのは、歳を取るにつれてどんどん変わっていきます。その中で、初年次から大学院までの文章力、表現力というものが、初年次のところではどのように位置付けられるかというのを、気にしているところです。東北大学の学生さんの数は多いので、弓野委員がおっしゃるように1年生のときからずっと全部一対一で対応出来れば一番いいのですが、なかなかそうもいかないものですから、記憶の中に残らないかもしれません。ただし、経験をされていますので、自分の中にはその学習成果が残っていると私は思っています。また、入学直後の最初

のアンケート結果よりも、年次が経った方のアンケート結果の方が理科実験の評価は上がるんですよね。自分で何を学んでいるのかを初年次に理解してはしっかりと自覚するというのはなかなか大変なことなので、最初に種をまくと言いますか、経験して頂くという目標を立てているわけです。長くなって申し訳ないのですが、指導する先生方、それからティーチングアシスタントの方々に対して、学期前にこういう目標を持ちましょうということをやります。そういうところを利用して、また新しい試みをどんどん入れて提案していきたいと私は思っています。以上でございます。

議長（倉光）：じゃあ、この新機構の立ち上げと共に、そういうふうなトップサービスと言いますか、そういうところもこれからより高度になっていくというような理解でよろしいでしょうか。

関根：もう少し強化していくということです。

議長（倉光）：さらに強化していくということですね。

松本委員：質問。

議長（倉光）：はい。

松本委員：1点質問です。今関根先生がおっしゃられたのは、自然科学系のことなんでしょうか。弓野さんのお話は、工学系だけの話ではおそろくないと思います。一番やっぱり問題になるのは、大学の人社系の、学部の学生じゃないかと思われ

ます。自然科学系の学生は、ある意味数式であるとか、数式やなんかでそれほどロジックを使わなくても、それなりに論理的になるような仕掛けになっている学問だと思います。

羽田：ちょっと補足しますと、その他に実際にレポートを書いたりする手段としては、基礎ゼミというのを本学では展開しています。これは全員必修に近いですね。ただ、方法論として全部のゼミで、レポートを書いて添削するというを導入しているわけではありません。ただ、先生方の中にはそこを重視している方もいらっしゃいます。それでそれをもう少し拡大するという事で、展開ゼミを2年前から拡大して、1年生の後期にも引き続きその少人数授業でもって、個別指導が出来るような形を取り入れて、現在はそれを拡大中なんです。ただし、この中にもライティング指導というのはまだ入れておりません。それで、学習支援センターを設けて、関根先生がセンター長をされているんですけども、授業の中で分からなかった学生に対する直接指導の機会を設けています。これは非常に効果があるんですが、その中にライティングを入れるかどうかというのは今大きな検討課題なんです。問題なのは、教員の方で、レポートをきちんと調べて書くという宿題を出さないと、ライティング指導をしても仕方がないわけですね。従って、個々の教員の方で今、委ねられている教育内容や方向について、きちんと論文というか文章を書く力を位置付けるということをやると同時に、それに対するサポートの体制を作ると。現実には、教員がレポート指導をすることは不可能です。現在の東北大学の中では個々の教員が担当するという事は不可能です。

松本委員：なぜですか。

羽田：これは時間的な問題です。TAとか、そういうやっぱり資源が入ってきて、院生とかそういう方々が実際にレポートの添削するというシステムを作らない限り、現在の大学生全体について細かなものをやるという時間的余裕はほとんど、正直に言えば存在しない。アメリカでもどこでもそうなんですよ。大学のプロフェッサーがやるわけではないんですね。それで、そういうライティングシステムを作るかどうか、今学習支援センターを拡充しながら検討をしているというのが、現状ではないかと思います。

中鉢委員：それは問題ではないでしょうか。非常に基本的なことで、例えば論文の書き方を教えるにしても、ドクターの学生に、修士の教育を任せているというのは、大学が本来やるべきことをやっていないのではないかと思います。

羽田：今、学士課程の学生の話を中心にしております。1年生、2年生ですね。そこの方の論文指導を、まあレポート指導のことをお話をしていて、今先生がおっしゃったのは大学院レベルの研究者養成で、これはきちんと指導していると思いますけれども、今はもっぱら1年生2年生の学部レベルでどういうふうに積み上げていくかなので、そこについての資源を教員がやるのは現実的ではないということでお話しました。ただし、我々も非常にこれをやる時には、大学全体についてアピールしなければいけないので、必要性については私どもも全く同じなんです。投入出来る資源やシステムについては、まだまだ力が足りないの

で、そこはぜひ、まとめの中で強く書いて頂けると、むしろありがたいというのが現状かと思います。

議長（倉光）：はい、分かりました。皆さん、SGH 校では本校の生徒の論文のチェックも、東北大の先生に色々やって頂いている部分もあるんですね。今お話聞いて、なかなかそこまでやると、やって頂くと大学の方にしわ寄せが来るのかなと思うんですけども、SGH 校では我々生徒は、今大学の先生に一部チェックして頂いているような指導も受けております。赤で添削して返して頂いております。時間の都合で、次に行かせてもらいます。理系学生に倫理の教育を徹底というのが、関根委員の方から出ておりますけれども、これについてどうでしょうか。

羽田：私の方から。私今、総長特別補佐で、研究倫理担当ということで東北大学の研究倫理対策の構築を進めておりますが、その中で今提案しているのが、研究倫理教育の体系化を提案しております。どういう内容かと言いますと、学生さんについては学士課程の前期。これは大学での学習の入り口として必要な研究倫理教育。これは、倫理というよりはむしろレポートの書き方であったり、それからいわゆる剽窃の問題。カンニングの問題ですね。きちんと勉強するにはどういう方法論が必要か。文献はどう集めるかという、いわば学習の基本というところで、入って1年以内ですね。1年というか半年以内かな。3時間は最低そういう講義を提供すると。現にやっているところもありますけれども。それから、第2段階は学士課程の後期からマスターにかけては、研究指導を

受けていきますので、その時に必要な研究倫理教育を受ける。これも3時間程度。それからマスターに入ってからさらに大学院として必要なもの。そしてドクターという4つについて、4つのレベルについて研究倫理教育を行う。そうすれば課題が違いますので、少しずつ異なっております。今までも生命科学研究科は院生全員必修ですけども、学部からやるという提案をしていて、ほぼ了解が得られていると思います。その点では研究倫理教育の体系化が、おそらく国立大学の中でも一番進むと思いますので、次の世代からなんですけども、ある程度のことは出来るだろうというふうに思っております。

議長（倉光）：はい、ありがとうございます。続きまして、王委員から国際標準、国際マナー。特に色々採用される基準が TOEIC で。TOEFL じゃなくて TOEIC であるとか、基準が低いんじゃないかというふうなご指摘がありましたけれども、この点についてはどうでしょうか。

山口：グローバルラーニングセンター長の山口です。よろしく申し上げます。東北大学の学生は英語力が低いというご指摘は本当にそうだと思っております。それについて、それと王委員から指摘して頂いたことに関しまして、私の方から3点ほど説明させて頂きたいと思います。まず、テストなんですけれども、挙げて頂いた TOEIC、それから TOEFL-ITP というのは、これは2技能の試験しか出来ないのもので、つまり、ライティングとスピーキングは試さないものです。それに対して TOEFL-iBT、それから IELTS、これは4技能を測定出来るものです。東北大学は、残念ながら

これまで TOEFL・iBT に関して試験が出来ませんでした。会場設定が出来なかった。ハード的な問題がありまして。これを、実はグローバルラーニングセンターの方で、2 年がかりで整備しまして、来月から初めて開催させていただきます。これが何が良いかというと、今までは主に東京まで出ないと、あるいは秋田とか、福島なんですけれども、そういったところじゃないと受験が出来なかったんですね。これを、仙台にしながら受験出来るという機会を提供することが出来るように、ようやくになりましたという点がまず第 1 点で、これは東北大学として当然 TOEFL・iBT の会場になるというのは必要なことだと思いますので、それを改善してきたということです。2 点目は、英語力が足りないというのは、これは本当にそうでした、例えばシリンド委員も入っているグローバル 30 のプログラム、学士コースでは受け入れる時の入学受験していいという資格の中で TOEFL・iBT に対して 79 か 80 ですよ。そのぐらいの基準を設けています。これは国際的にも、まあこのぐらいないと駄目という水準なんですけれども、一方で TOEFL・ITP で測って、同じぐらいの水準っていうのが 550 と言われているんですが、それに達している、東北大学 1 年生で毎年計っているんですけれども、3% しかいないんです。非常に歴然とした差があって、これはまずこういう事実からスタートして、これをどういうふうに克服するかということを考えなくては行けないと。これは高校の先生方の前で発言させて頂いているのは、これは大学教育だけの問題ではないと思っていますので。日本全体が取り組まなくては行けない問題だというふうに認識しています。3 番目に、ただ、そういう状況ではあるんですけれども、手を

こまねいているわけではなくて。この高度教養教育・学生支援機構の中でも言語・文化教育センター、それから我々のグローバルラーニングセンターの方でも、ちょっと形は違うんですけども 1 ヶ月未満ではありますが、短期の留学を強力に推進しています。数年前まで数十人しか行かなかったものを、ちょっと数字は今覚えていなんですけど、去年今年は 300 人程度送ることが出来るようになっていきます。これは、語学を学ぶだけではなくて、様々なテーマを、それぞれのテーマを設けて、色々な学習をするという機会を設けているんですけれども、これは学生にとってはかなり語学に関しての動機付けになっていると思っておりまうので、今後そういったことを含めて、学生の英語教育を含めて伸ばしていければと思っています。

花輪：TEA はどうですか？

山口：それから、グローバルラーニングセンターの中では、東北ユニバーシティイングリッシュアカデミーということで、ネイティブスピーカーの方を招聘して、学内で集中的に課外授業を受けてもらおうと。そういったこともやっています。こういった施策も通して、少しずつではあると思うんですけれども、語学教育、英語教育を伸ばしていきたいというふうに考えています。

議長（倉光）：はい、ありがとうございます。シリンド委員の、これはいいですかね。今倫理の講義についてご説明がありましたので。全体を振り返って、学生委員の方から、この点もっていうのがもしありましたら、お受けしますけれども。は

い、弓野委員お願いします。

弓野委員：先ほど関根先生から色々ご説明あって、いかに理系の学生が論理的な文章力を鍛えるために、色んなことをして頂いていたかというのが分かって、そうなんだなというのを思っただけ。確かにその自分で意識をしていないけれども、力が付いた部分は確かにあるかなとは思っただけですけれども。ただちょっと私の頃の学生総合実験は、本当に書いて出すっていう作業だった感があるので、今はもっと強化されているということで良かったなと思いました。また、先ほど松本委員の方からもあったんですけれども、確かに理系の学生はいいと思うんですけれども、文系の学生の友人たちの話を聞いていると、どうもその卒業論文とかも何万字書いて出すみたいなの。何かそれでその後、何か修正がある感じはあまり受けなかったもので、もう出しちゃえば卒業だみたいなところを感じていて、何かこうちゃんとフィードバックがあるシステムになっているのかなというのが、多少大学全体としては思うところかなというふうに思いました。はい、以上です。ありがとうございます。

議長（倉光）：はい。何かその点につきまして。

花輪：何か言わなくてはいけないかなと思っただけ。新任教員研修の時に、私は講師になっているんですけれども、今のとは直接、ちょっとずれるんですが、教育っていうのは全人格と全人格の戦いであると。先生と学生が、やっぱり真摯に向かい合って、初めて教育が成り立つんだと私は思っています。だから、ぶつかってくださいと私は先

生にお願いしています。同じことは、今弓野委員がお話されたように、単に課題を与えておいて、出して来たらそれでおしまいというのは、やっぱり向き合っていませんよね。そういうところを解消すべきなんだろうというふうに思います。直接的な答えではないんですが、やっぱりフィードバックをかけるっていうのは非常に大事で、必ずやるべきことだと思いますので、そういうことをさらに先生方をお願いしていきたいというふうに思います。



議長（倉光）：はい、よろしくお願いします。

関内：よろしいですか。

議長（倉光）：どうぞ。

関内：関連で、人文社会系の文章力についてです。教育評価分析センター長の関内でございます。私たちは各学部の4年生の卒業生が、どんな能力を付けて社会に出て行くか、もちろん各学生の自己評価なんですけれども、それを確認する作業というのを最近やりました。今のお話と関係している点では、特に文学部の学生さんが卒業していく時に、一番良かったのは何かと言うと、卒業論文を

書いたということなんです。卒業論文を作成していく中で、自分の知識を総合して、かつそれを的確にまとめていくという訓練を受けることで自信がついたというのです。そうした意味で、人文社会系の学生にとって、自分の考えをそれなりにまとめて、かつそれをきちんと分かりやすく公表する、そして教員に見てもらおうという、こうした訓練が、大学の中では結構大事なのだと思います。3年生、4年生から、先ほど理科系の講座のお話がありましたけれども、文系でもやはり講座の中で、先輩の学生が色々教えていくというようなシステムが、伝統的な研究大学として残っているのがやはり、東北大学の強みじゃないかなと思います。ただし、機構長が言われたように1年生、2年生の時点から文章力を強めてほしいというのは、実は先生方からも結構声が上がっています。工学部の先生方からよく聞かれる要望なんですね。それに対して私たちが現在、実践していることは、基礎ゼミや展開ゼミで、実際に自分のテーマに即して、まとめる作業を実体験してもらうなかで、文章力をつけていくというのが現状です。ただ、先生方からは講義形式で文章の書き方を教えてはどうか、という意見もありますけれども、それに対しては、例えば文章の書き方の授業として、大学受験の予備校でやるような小論文の書き方と同じようなものを大学でもう1回やるのが果たしていいのか、どうなのかという議論もあるわけです。結局、自分の興味関心のあるテーマに即して、基礎ゼミとか展開ゼミを取って、実際にまとめてみる経験が、文章力の真の向上につながるんじゃないかという思いが私たちにはありますので、今のところはそうした形になっているということだと思います。

議長（倉光）：はい、安藤先生。

安藤：すみません、私は、言語・文化教育センター長にもなっております、そちらの方はどちらかというと外国語の方なんです。私は所属が工学部なものですから、学部教育の立場から文章構成力の育成について色々文句を付けている方です。文章を、やはりいい文章を書くために必要なのは、先ほどチェック・アンド・レビューで直して頂くというのも必要かと思うんですけども、やはり良い文章をたくさん読むというのはすごく大事なところで、松本委員が言われた新聞をちゃんと読みなさいというのも、非常に共感するところでして。いろんな、教科書もそうなんですけれども、その他のいろんな図書を読む時間というのを、きちんとやっぱり作ってあげないといけないだろうというふうに思うところがあります。一方で、じゃあ今東北大生、特に理系の学生なんかを見ていると結構忙しいんですね。科目を詰めすぎているというところもあるんですが、いろんな宿題が、学生さんの方にちょっとお聞きしたいぐらいですけれども、結構宿題とか色々、先ほどの自然科学総合実験のレポートを作る時間を取られて、なかなかいろんな他分野の本を読む時間が少なくなっているんじゃないかということも、ちょっと思ったりもしています。文章力を伸ばすというのは、やはりある意味時間がかかる作業でして、先ほど関内先生の方から単に講義を作って、そこでノウハウ的なものを作っていけばいい文章が書けるというものでもないだろうというのも思っています。ただ、やはりそういう意識付けを学生に対して呼びかけていく。最後の卒論の時になってバタバタ慌てるのは、やっぱりちょ

っとみともないので。いろんな意味でそういうレポートを書かせて、もちろんそれに対してリプライが来ればいいんですけども、何回も書かせる機会を設けるということ自体も、教育としてはやっぱり大事なんだろうなというふうに思っている次第です。少し言い訳とそれから現状をご紹介します。

議長（倉光）：はい、ありがとうございます。あとは清水委員、何かありますでしょうか。

清水：先ほど少し触れたんですけども、学生の生活保護支援と言いますか、メンタルケアと言いますか、そういった対策については何かあったりするのでしょうか。

安藤：色々な役目を担当しておりまして、学生相談特別支援センター長も担当しております。学生相談関係では、色々な悩みを持って入ってくる学生に対して、その支援体制をひとつの機構の中で対応している大学というのは他に無く、東北大学の非常に大きな特徴のひとつであるというふうに思っています。花輪先生からもそういうご紹介があったかもしれませんが、学生からの悩みというのはいろんな意味で1年次から始まっていて、特別支援の場合は置いておきますが、いわゆる東北大学に入ってくる学生は、ある意味高校では優秀な部類に入っていて、それが大学のところで学び直しを、いわゆる高校でのやり方が通用しない、入試問題の解き方では、通用しない授業を受けていく。そこでつまづくということを経験すると、例えば今まで非常に得意であった数学が、何も分からない。とても辛い授業であるというこ

と自体からのつまづきが始まったり、また文系の学生ですと、ある意味自分がこの大学で何をやっていいかという目的を見失うとかですね。いわゆる出口が見えてこない。自分のキャリアプランとして、どういう能力を伸ばしていけばいいのかというのが分からない学生というのは、やはり少なからずいます。そういった悩みに対しての相談窓口として、学生相談というのがありまして、まだ自分で悩んで行こうという意欲がある学生はまだ良くて、本当に辛くて学校に出てこれられない。いろんな意味で辛いということを感じている学生に対してのケアを担当する場所として学生相談というのがございます。いろんなところでこういうところに来てくださいと広報はさせて頂いています。またもうひとつは研究室に入った後に、中で孤立するとか、研究室の先生とうまくいかないという、そういった場合に関しても学生相談の方でも対応しています。担当の先生であったり、その上の研究科長であったり、そういったところと対応して、交渉しながら、学生にとっていい学生生活を進めるような努力はしておりますので、もし物足りない点がございましたら、ぜひ色々と教えて頂ければと思います。

議長（倉光）：はい、どうぞ。

清水委員：そうですね、窓口があるのはとても素晴らしいことだと思うんですけども、やっぱりその窓口の問題を、悩みを持っていける人っていうのは多分ましな部類というか。あまり問題がないと思うんですけども。やっぱりそのむしろ窓口に行くという前の段階でつまづいているような人を、どうすればいいのかということがあると

思うんですね。やっぱりその単位を取得するとかでは、そういうのは図ることが出来るのかなと思うんですけども。

安藤：1年次の授業に出てこれない学生に関しては、必修科目の英語、数学、物理等の授業で3回以上連続して休んだ学生は、全て教務課の方でチェックして、それから学生相談を経由して、連絡を取るようにしています。あとはただ、専門の部局に入っていた段階ですが、研究室に入った後は研究室をウォッチ出来るのでまだ良いんですが、2年生が3年生になった段階のところではつまづかれると、少しそのウォッチが甘いというのは感じています。また、研究室の中で、先生との折り合いが悪くて出てこれなくなった学生に対して、先生がどう対応するかに関しては、これはもう教員の、スタッフに対してのFDで教育、指導をしていかなくてはいけないところだと思っています。

花輪：補足なんですけれども、本学はキャンパスが5つありますので、そういった意味で多少、他のひとつのキャンパスになっている大学とは違った環境にあるんですね。それで、学生相談・特別支援センターっていうのは川内地区なんで、例えば特に離れているキャンパスの人たちの対策をどうするか等々色々あります。そこでは学生相談所の先生が、1週間に1回行ったりということもしていますし、また各部局にそういう学生相談に関する先生方を決めて頂いて、その人たちと意見交換会をするような場を設けているという、そういうこともやっております。確かに清水さんおっしゃるように、自分でそういう相談を積極的に

受けたい、受けよう、聞いてほしいという方はまだ恵まれていると言えは恵まれていて。そうじゃない人たちがいるということも、こちらは分かっております。それはやっぱり今安藤先生がお話されたことと同じことを言うんですが、やっぱり身近にいる先生方が常にケアをすると。常にウォッチするというような意識が必要なんではないかなというふうに思います。そういうメッセージも含めて、毎年4回ぐらいFDなんかもやっております。

松本委員：今の件に関連していいですか。

議長（倉光）：はい。

松本委員：今の件に関連してなのですが、今、安藤先生が研究室制度のことをおっしゃられていて、他の大学を取材する中でも実は、同じような話を良く聞くんですね。それはその、研究室に入ったことで教員との相性が非常に悪くて、メンタルが不安定になる学生が多いというのは、他の大学でもよく聞いています。この研究室に入るといことが、ふたつの相性の問題もあるし、もうひとつはやはり教員に嫌われたくないから好かれようとするために、新しいものが生まれないという。どんどん新しいものをやりなさいと、どれだけ教員の方が言っても、やはり相性のことを考えると、学生が新しいものを出しにくい。結局はその研究室、その先生の専門分野でちょっと手直しをするだけで、違うものを出してくる。つまり大学が新しいものを作り出せない元凶みたいなものに、その研究室制度があるんじゃないかというのをずいぶん多くの大学の学生さんが話をして

くれました。補足です。

中鉢委員：よろしいでしょうか。

議長（倉光）：はい、どうぞ。

中鉢委員：上司とうまくいかないというのは、大学だけの問題ではありません。社会においても色々ありますし、私も経験しました。本来はそのような時にどのように対処するかということを判断出来る力を持っていないといけないと思います。その逐一の問題に対してどう対応するかというのは、その粒度の細かさによって対応しきれないところまで行く可能性もありますので、どこかしきい値を決めておかなければいけないと思います。いずれにしても、例えば我々は大学を出て、そのような能力を持った人間であるはずなのに、公的な研究機関であったり、産業界においては、やはりメンタルな問題というのは未解決のまま持ち越していますし、論理的な考え方にしても、研究者倫理に関しても、大学で本来教わっていなければいけないことなのに、まだ不十分であると思います。実際に社会はどうなっているかというと、それに対してきちっと再教育をするところまでやはり進んでいません。そうすると研究者は一体どこで学ぶのだという、根源的な問題にまた戻ってしまいますが、やはり OJT（*On-the-Job Training*）の中で、ひとつひとつ手間暇かけないといけないことなのだろうと思います。ここでは答えが出ないかもしれませんが、日本の社会の中での共通の問題であるように、私には感じています。

羽田：補足いいですか。

議長（倉光）：はい。

羽田：さっきの研究倫理と連動するんですが、さっきは学生さんへのケアというか体制をお話しましたけれども、東北大学では教員についても体系化を考えていて、ひとつは新任教員の時にやはり3時間程度、これも3年に1ぺんかな、受けていく。それから院生の学生は研究指導をする時に、これは捏造を自分がしてはいけないというだけではなくて、研究者として学生に対する指導の時に、指導しなくてはいけないんですね。その指導の中身は、ただ不正をするなという以外に、ここで問題になっているように、やっぱり学生に対する、学生を成長させるためにどういう指導があるかという内容を含んだ講習、研修も3時間受けるというのを考えています。それから、さらに各部局で10%程度、メンター教員、指導教員を置くということも考えています。これはやはり閉鎖的な環境が一番良くないので、困った時に学生が相談出来る、あるいは指導に困っている教員が、相談出来る経験の深いシニアな教員を各部局で10%ぐらいは持ちたいと。この方たちは、色んなケースを知っていて、研究理論のこともそうですけれども、研究指導で困った教員が相談しに行ける。あるいは逆に、研究指導で困らせられている学生が相談に行けると。こういうメンター教員を置く制度も、今同時に提案しています。多分おそらく、僕もいくつか外国の大学を調査していますけれども、結局はその人間関係と教員の集団の力の中でしかやっぱり解決出来ないんですよね。いくらでもルールを作って、コンプライアンスをやっ

も。その制度を今作り始めているので、100%ではないけれども、少し今問題になっている点には動いていくかなと思っております。

松本委員：追加で質問してもよろしいですか。

議長（倉光）：はい。

松本：今、羽田先生がおっしゃられたその体系的な研修の中に、教員の文章力を担保するような研修って含まれているんでしょうか。つまり弓野委員のお話だと、この歳になるまでこんな文章を書いているんだと思われる方がいらっしゃる。それはおそらく、そういう指導を受けてきたのかもしれないし、指導を受けていないのかもしれませんが。率直な話を申し上げますと、天に唾する行為でもあるんですが、研究者の論文を読んでいて、ずっと読めて、ああなるほどって読める文章は少なくなっているような気がするんです。だから一体、どういう訓練を受けてきたのかなと思って。

羽田：これは、入っていません。元々やっぱり学術論文のものというのは同僚、専門家に読ませるためのものなので、日常言語では書かないので、少しロジックが違うという点もあるんですね。だからそこも含めて、同僚世界でもって評価される文章であって、必ずしも文法的に正しいとか、読みやすいというのが、必ずしも一致していない。立派な学者の中には両方書ける方も、エッセイも書けるし論文も書ける方もいらっしゃいますが。それで、正直に言えばそのところのチェックは、各研究科でもって採用される時に、きちんと文章は書けるかという点を確認するというぐらいに

今のところはなるんじゃないかと。ただ、教員の指導ということよりも、むしろ学生を指導するという仕組みがしっかり出来て行けば、学生を指導する以上、教員もきちんと原稿、文章を書けなくてはいけないので、波及的にそこがうまく行くのかなという期待をしておりますけれども。そこは我々としては、なかなか踏み込みにくい部分ではあります。

松本委員：内田樹さんが書かれていたものなんです。要するに同じ分野の同僚に読ませる文章なんか、はっきり言って研究者は誰でも書けると。同僚以外の人に専門分野をきちんと平易な言葉で説明出来るのが、教養教育だと書かれていました。補足です。

議長（倉光）：外国人委員さんの方で、何かあと追加して言っておきたいことはありませんか？

王：すいません、話がちょっと本日の問題とちょっと飛んでしまいますけれども、外国人としての何というか、感想なんですけれども。日本の社会ってというのは、大学と社会的の教育の間はかなりギャップがあると感じていて。具体的に言うと、学部生の就職活動を見てみれば、何かおかしいなというふうにはよく外国人は感じています。なぜかという、みんな2年生の半ば頃あるいは3年生から就活をやって、内定は4年生の前半頃貰って、そこから卒論を書き始めて。つまり、そういう卒論を書く目的は卒業するだけで、実際そういう、まともに勉強した成果として積み重ねてきた論文は、会社側では何も読んでくれない。それはひとつのインセンティブがなくなるし、自分はち

ちゃんとやってきたことを社会としては全然見てくれないというのは、すごくおかしく感じております。ここですぐに変えられる話ではないんですが、もし学生さんがちゃんと書いた論文を、例えば、ドイツでも中国でも、じゃあこれは私の卒論だっていうふうに会社は読んでくれて、そこから仕事の、採用の話とつながるなら自分の成果をみんな認めてもらえるし、何というか見なされているかなという感覚です。すいません。

議長（倉光）：はい。分かりました。

安藤：今ご指摘の意見は、工学部の中でも議論されていて、これは教養教育というよりもっと上の卒業、それから社会との関係というところで、大学は何をすべきかという議論に関係しています。日本の社会っていうのは世界でも稀で、スキルがなくても就職が出来る社会。世界の標準は、きちんとスキルを大学で身に付けて、社会や会社の中に採用されていくというところで、例えばインターンシップ制度ひとつにとっても、他の外国、例えばドイツなんかでも、インターンシップで企業に行って経験しながら、こいつはぜひ欲しいというので、それが就職に直結している。あるいはその卒業してから、色んなところを会社を回りながら、自分のスキルが生かせるような会社にインタビューしながら、採用されていくというシステムだと思うんですね。日本の場合はそうではなくて、ある意味これは、中鉢委員にぜひご意見をお聞きたいところですが、オンザジョブトレーニングというのはきちっとしていて。企業の中で。ある意味で、その大学の方で基本的な学力と、人間性を身に付けてくれれば、あとは企業の方でその目

的に合った人材育成というのがちゃんと出来るというベースが存在していたというのがこれまで機能していたのではないかというふうには思っています。

中鉢委員：そうですね。企業の OJT の教育プログラムというのは、私が勤めたところもそうですし、他の企業も見たことがあります。大学よりもはるかに良く出来ています。自分に合うものを探す選択肢が 1,000 を超えているのではないかと思います。通信教育や英語も含めて、選択出来るようになっています。そうすると、大学では、本当に大学の学歴を取得しただけで、本当の勝負は社会に出て決めるぐらいの予測というか予感を持って、学生たちも来ているのではないかという感じがするくらい、充実したものであり、リアリティがあるのです。例えば、トヨタ自動車では、ねじの見分け方から教えるわけです。また、大学の機械工学を卒業した人が、ウォークマンを作れるかという結局作れません。大学では教えていない分野も多く、例えば今製鉄業や鋳物を教えている大学はないと思います。日本の根幹的な産業であるにも関わらず、関連性がものすごく離れていると思います。また、読み書きにおいても大学での読み書きというのは、学部では論文であって、基本的な読み書きは教養部で学べと言いますが、教養部ではそのようなものは高校で学んでくるものだと言うのです。このように少しずつ先送りにされて、高校でもその読み書きが十分に教えられていません。本来の旧制高校というのを思い返しますと、私は学生紛争の頃でしたが、もう仕事のように本を読んでいた。本を読まないだと太刀打ち出来ないからです。留学生の皆さんは分か

と思いますが、米国では小学校でのリーディングという、何時間かの読書の時間がありますが、子どもは大変喜びます。日本では論理が大事だと言っても、読書の時間を取って、さあ本を読みなさいというのはあまりありません。それでは本気で論理を教えていますかという、私はそうは思いません。例えば東北大学が、教養部の時に論理を1から叩き込むというカリキュラムをしたら、東北大学の株は上がるのではないのでしょうか。東北大学の教養部を出た学生はひと味違うとなるのです。徹底した論理を教えるということは、産業界はむしろそういう人を求めているという事実だということを触れておきます。

議長（倉光）：はい。それでは、学生さんはこれぐらいにして、企業側の方に移りたいと思いますので、渡邊委員の方からお願いします。

渡邊委員：時間から言って、私が発言する最後の機会だと思いますので、ふたつほど。ひとつは、授業に出てこれなくなる学生さんに対する対策、先ほど安藤先生の話にもあったんですけども、対処療法ですよ。これは、本当に私も同じ悩みを共有しております。つまりやる気がある学生さん、生徒さん、これは心配ないと思うんです。どこでもまあ何とかやっていけるだろうと思うんですけども、そうじゃなくて、まあ頭が良いんだけど、たまたま良くて、そして色々なテストもこなしてきて、そしてそうすると褒められたりもしたんだけど、いざ入った後で悩んでしまう。自分は何をしたら良いだろうかということは結構あると思うんですね。そのときにそういうようなケアする機関もあるということは、それは

それで必要なことですが、やはり、そのような学生・生徒にならないように、組織的にやっていく何かが必要なんじゃないかなというふうに思うんですね。これもなかなか難しい話で、先ほど花輪先生が、教員が全人格的に対峙していくというお話に解はあるのかもしれないんですけども、なかなか難しい話ですよ。ただ、これはなかなか難しい問題だとは思いますが、これはこれから必要なんじゃないかなということが第1点であります。それから第2点は、先ほど企業側ということで、中鉢先生からお話し頂きましたけれども、教育界と言いますか、高校側からちょっとお話しいたしますと、アクティブラーニングって今盛んに言われておりまして。こういう手法は、とても大事だなと思うんですけども、同時に、背景に何のために学ぶのかというところがないといけない。アクティブラーニング的なものはどんどん進んでいくけれども、その部分が忘れられると、あまり効果が出ないんじゃないかなというふうに思います。従いまして、しっかりその部分、すなわち、なんのために学ぶのかということを踏まえたアクティブラーニングを大学で身につけていただいて、そういう理念とかスキルを持った卒業生の人で、教育をやりたいという方にはぜひ教育界に進出して頂ければと思います。教育もなかなかやりがいのある仕事だと思いますので、そのふたつをお話しして、お願いと言いますか、提起とお願いいたします。

議長（倉光）：ありがとうございます。それでは次、小笠原委員をお願いします。

小笠原委員：今日は幅広い分野からお話頂きまして、ありがとうございました。今私は、教育の現場から離れて2年目になります。PTA って何なんだろうなともう一度学んだところですが、このPTA って言うのは一言でいうと、生涯学習の場と書かれてあります。この生涯学習というのは、もうだいぶ前から、皆さん方社会の中でも言われ続けてきたことなんですけど、もう少し学ぶということを限定的に捉えることなく、広い視野を一人一人の人間が、成長段階の中で身に付けて行きながら、先ほど PTA 会長さんのお話をいたしましたけど、どういうふうに自分の生き方を積み重ねていくかということを、大切に作る人間に育っていけたらなと。これは私自身も含めてであります。カリキュラムの元々の語源っていうのは、積み重ねというところにあると私も学んだことがありますので、やはりその積み重ねを大事にする。どんな場面においても、このためにこれを学べじゃなくて、今学んでいることがいつしか必ず役に立つんだということを、一人一人が当事者意識を持って行って、生きていくことが大事なのかなと思います。実は私も、今この事務局長の仕事をしております。何でこれが前、こうだったのかなと。前の資料を見ます。ところが、前の資料を読んでもこの通りにやればいいという問題ではないんですね。何でこうだったんだろうかと考えるから、こうやればこういうふうに方向性が見えてくるんだというところがあるわけですね。改めて、私も今の仕事を通して、考えるということの大切さ、そして当事者意識に立って、どういうふうに周りの方々の役に立てればいいのかということを、大事にしていきたいなと感じているわけです。ちょっと長く、まとまりのない話になりましたが、

ぜひこの積み重ねということを大事にしていきたいと思います。

議長（倉光）：ありがとうございます。松本委員をお願いします。

松本委員：何度も申し上げますが、新聞は最低限毎日読む。当たり前のことをやる。もちろん弊紙じゃなくて全然構いませんので、どこでもいいからとにかく新聞を毎日読む学生であってほしいと思っています。もちろん、先生にもお願いしたい。それによって社会を知る。考える。自分を客観視出来る。自分は何のためにここで学んでいるのか。それを引いたところから見つめることが出来る。先ほど渡邊先生がおっしゃられましたように、何のために学ぶのかというのが、学ぶ姿勢を変えていくんだと思います。それで学んだことを、社会とキャッチボールする。そういった人であってほしいなと思っています。もう1点、お願いしたいことは数値目標です。数値、目標です。これは目的じゃないです。例えば先ほど弓野委員もおっしゃっていましたが、他の方もおっしゃっていた倫理観にしても、論理的な文章にしても、基礎がなければ出来ない。でもその基礎になかなか人材が割けないというのも良く分かります。そこで例えば、月に何冊本を読んで、学生に本を何冊読ませたいか。そしてフィードバック付きのレポートをいくつ書かせたいのかという数値目標を掲げ、教員職員、学生で共有したらどうかというふうに思っています。何度も申し上げます。社会観のない学生がそのまま社会に出てくると、本人が不幸です。先ほど中鉢委員がおっしゃられたように、OJT のしっかりした企業なら

まだいい。でも日本の多くの企業は、採用選考の段階で卒論なんか読んだことはおそらくない。学生の成績すら見ないで内定を出す企業の方が圧倒的だと思います。そういう中で OJT に期待するのではなく、自ら学ぶ力、何のために学ぶのか、内省することができる。その原動力は最低限学生のうちに火を付けておいてもらいたい。そういうふうに思っています。よろしくお願いします。ありがとうございました。

議長（倉光）：ありがとうございます。それでは、中鉢委員をお願いします。

中鉢委員：人間、三者三様の生き方があると、夏目漱石は言っていますが、ひとつは真理を探究するタイプの生き方、もうひとつは社会を変える、政治家になったり実業家になったりという生き方です。もうひとつ最後の生き方は、人生を味わうという、人文科学的な、あるいは芸術の世界なのかもしれませんがそのような生き方です。我々がこの3つのうちのひとつを選択するとき、他の残りふたつがおそらく教養というものなのではないでしょうか。三者ないと、ちぐはぐな知識の偏りが出てくるということです。この多様性の中で、教養と専門というものを捉える必要があるのかなと思います。その中で知識を学ぶのは大学が主を担っていくわけですが、先ほど王委員がお話されたように、大学での知識と産業界、実社会との関連性が日本は極めて希薄であると思います。言い過ぎかもしれませんが、大学の教育にもうひとつリアリティが欠けているのではないかということを感じます。ではそのリアリティを増すためにどうしたらよいかというと、例えば

ですが、産業界の人材をもう少し教養課程の中で活かしていくということです。学生は、大学の教育にリアリティがないのを感じているのだと思います。どうせ社会に行ったらこれは役に立たないだろうとなると、本気になるわけありません。大学を卒業しプロの研究者になった社会人が凄みを見せてやらないと、学生は本気にならないのではないのでしょうか。私も今年教養部の学生に対して、講座を90分2コマやらせて頂きましたけれども、9割方の学生は一生懸命聞いておりましたが、やはり寝ている学生もいるのです。そのような寝ている学生に対して、現役の先生が何も言わないのもどうかと思います。私は別にプロの教師ではありませんがこれはないだろうと思いました。いずれにしても、色々と考える機会を学生に与えることが重要で、ソリューションを与えることではないと思います。学生は悩ませる必要があります、甘やかしてはいけないと思います。

議長（倉光）：ありがとうございます。大体時間が、残り25分となりました。時間の都合もありますので、今日の各委員の皆様から頂いたご意見や意見書をもとに、東北大学への提言という形でまとめさせて頂きたいと思います。最終的なまとめ案につきましては、今日のテープを参考にし、それをもとに議長の私の方に一任して頂ければ非常に助かりますが、よろしいでしょうか。

委員：はい。

議長（倉光）：ありがとうございます。あとは責任を持って提言書をまとめていきたいと思えます。ありがとうございます。それでは、以上議長

役を終わらせて頂きますので、事務局の方にバトンをお渡ししたいと思います。よろしくお願いします。

花輪：どうも長時間、ありがとうございました。非常に貴重なご意見を聞くことが出来ました。感謝を申し上げます。今日色々ご意見を頂いたわけなんです、本機構としてどういうふうに答えられるか。あるいは答えられないのか等々検討させて頂いて、やれるものはきちんとやっていこうというふうに考えております。少し抽象的になりますが、回答ではないんですが、私の考えを少し述べさせていただきます。ひとつは先ほど大学の教育っていうのは、もちろんどの教育でもそうなんです、やっぱり人間と人間のぶつかり合いだと思うんですね。十年一日のごとく、講義ノートを持ってきて、学生の顔を見ないでしゃべって終わり。これはやっぱりもう許されない時代に入ってきていると思うんですね。私たちはやはり真摯に学生と対峙して、自分の持っているものを学生にぶつけると。学生はそれを受け止めて、学生も真摯であらねばいけないと私は思いますけれども、また教員に返すとそういう双方向のやり取りがなければ、やっぱり教育というのは成り立たないんじゃないかなというふうに思います。これは新任研修の時の、私のお願いですというふうにお願いしている項目であります。もうひとつお願いしているのは、一番最初に中鉢委員がお話されたことなんです、やはりこれはみんな、我々感ずることなんですけれども、東北大の学生ってやっぱり大人しいんですね。自分の意見を持っているとは思いますが、きちんと言わないというようにすることがありまして、これも先生方の力で元氣

にしてくださいというようなお願いをしています。ひとつは仕組みも作っておりまして、すでに羽田先生の方からお話がありましたけれども、基礎ゼミ、展開ゼミっていうのを、基礎ゼミは相当長い歴史を我々は持っています。展開ゼミは始めて今年で3年目なんですけれども、積極的にこれを推進しています。基礎ゼミっていうのは何かということなんです、全ての部局から、先生方は大体300人ぐらい出でくださっていると思うんですが、160のクラスを作りまして本学2,500名が1学年ですから、大体15、6名。いわゆる少人数教育と呼べると思うんですけれども、その中で今流行りのPBL型と言いますか、課題解決型の学習をしてもらおうと。その中では先生の講義のみならず、学生自身が動いて、調べて、考えて、それからレポートを出すと。そういうものを行っているんですね。これはすごく学生にとっても良かったと。実は明日、成果発表会があるんですが、非常に良かったという声を聞いていますし、先生方ももうみるみる、半年なんだけれども、みるみる学生が育ったのが分かります。そういう感想をくださる先生もおられます。そういうことで、実は3年前にこの続きと言いますか、もうひとつもっと先をやりたいとか、あるいは別のテーマでもやりたかったという要望がありますので、展開ゼミというのをさせて頂くことになりました。現在は60クラスぐらい。大体900名ぐらいということで、3分の1を超しているんですけれども、これを100クラスぐらいまで早急にしたいなということで、今考えています。実はその中のひとつが、読売新聞の寄付講座で、新聞を読むということで、そういうこともやらせて頂いています。どうもありがとうございます。その他に色々中鉢委員も先

ほどこ言いました、2 クラス頂いております。それから校長先生方に来て頂いて、教育実践演習ということもやらせて頂いております。言いたいことは、非常にダイバーシティと言いますか、色々な学生がいる中で、こちら色んなものを提供して、その中で合う合わない、あるんだろうと思うんですけども、学生に目覚めてほしいなというふうに思っています。大学、学部4年あるいは6年の中で、その自分の選んだ専門の分野ですら全貌を知ることには出来ないんですね。当たり前なんです。だから私たちは、知の体系がどこにあって、それにアプローチするのは、どういうふうになればアプローチ出来るかという、いわゆる学び方を学ぶことを伝えることなんだろうと思っています。それが成功すれば、本学としていいんじゃないかなというふうに思っております。本学は教養教育院という組織、この機構の中に持っているんですけども、これは名誉教授の先生方。6、7名の先生方をお願いしてやってもらっています。哲学を専門にされた先生2名おられますし、数学の先生もおられますし、色々な立場の先生がおられるんですけども、毎年2回、学生に対して教養教育とは何だろうと。みんな一緒に考えましょうよというのをやっております。その成果も報告書になって纏まっておりまして、今後それを本にしてみんなに読んで頂こうと。そういう計画も立っているんですけども、なかなか教育っていうのは難しいと思いつつ、今すぐ我々対応しなければいけないということもありまして、日々悩みながら我々進んでいるような、そんな状況です。そういう中であって、本日こういう諮問会議。色々な貴重なご意見、お叱りも受けたと思います。これを明日から生かせるように、我々は受け止めたいと思

ますので、さらに今後ともご支援よろしくお願いしたいと思います。本日はどうもありがとうございました。

司会（羽田）：どうも長時間ありがとうございました。委員の方々の厳しくもあり、かつ温かい励ましの言葉に、私どもも。教育はすぐ変わるものではございませんので、色々努力はしておりますけれども、またすぐにはその成果は見えないかと思っておりますけれども、今後とも努力して参りますので、引き続きよろしくご支援、ご協力お願いいたします。本日はどうもありがとうございました。

あ と が き

東北大学高度教養教育・学生支援機構は、業務センターと教員所属組織の分離、統合的な教育・学生・学習支援機能などいくつかのユニークな特徴を持っています。その特徴の1つが、学生を含めた関係者で構成された機関である高度教養教育諮問会議です。

日本の大学においては、教養とは何か、教養教育とは何かに関して長きにわたる論争があります。確かに、専門教育の基礎教育も含んだ一般教育が制度として成立し、実施されてきていますが、そのことと教養教育や教養の概念が合意されているかは別な問題です。ましてや、私たちが実現を目指す「高度教養教育」という概念は、東京大学、大阪大学、筑波大学ではすでに実装されているけれども、用語自体が大学界で共有されているものではなく、さらに論争的です。

しかし、主として学士課程教育の前期課程に配備され、専門教育との対抗概念で意義づけられてきた今までの教養教育概念が、大きな限界に直面しているのは明らかです。例えば、学術団体をはじめとして、近年いくつかの提言があります。「一般教養教育と専門教育との間に広がりつつある溝を埋める『21世紀型科学・技術リベラルアーツ教育』」（日本学術会議「提言『日本の展望－学術からの提言 2010 理学・工学からの提言』 2010 年」）、「専門教育は……教養教育の一翼を担う『専門教養教育』として行われることが重要」（日本学術会議日本の展望委員会知の創造分科会「日本の展望－学術からの提言 2010 21世紀の教養と教養教育」 2010 年）、「理工学リベラルアーツ教育」（日本工学アカデミー「21世紀日本新生に貢献する科学技術政策の提言－持続可能なイノベーション創出能力の強化策－」 2009 年）などは代表的なものです。これらが、私たちの目指す高度教養教育の概念と必ずしも一致はしていませんが、方向としては重なっています。

概念だけでなく内容を創造するにはどうしたらよいか、大きく二つのアプローチがあります。一つは、知を生産する大学の研究と教育の中から明確にすること。もう一つは、社会の側からの期待を明確にすること。教養とはあくまでも社会的な存在ですから、すでにある教養だけではなく、これから求められる教養も、社会の中から真摯に汲み上げていく必要があります。とりわけ、学生は、教養教育の現時点での受益者というだけでなく、次代を担う視点から教養を求め、作り上げていく創造者の役割を持っています。留学生も含めた次世代の声に耳を傾け、ジャーナリストの視点、社会の持続的発展を担う産業技術と企業の視点、最高学府としての大学に学生を送り出す高校と保護者の視点、これらを融合して、高度教養教育のあるべき姿を模索することが、第1回の諮問会議の目的でした。倉光恭三議長のリーダーシップによる運営で、各委員の忌憚ない意見が語られ、答申として結実しました。東北大学高度教養教育・学生支援機構は、各界との対話を続けながら、教養教育を創造するきっかけとして本報告書を位置付けます。お読みになった方からのご意見も、わたくしたちには貴重な糧であり、期待しております。

2016 年 1 月

東北大学高度教養教育・学生支援機構
副機構長 羽田 貴史

IEHE Report 62*

**東北大学高度教養教育・学生支援機構 高度教養教育諮問会議
－ 報 告 書 －**

2016 年（平成 28 年）3 月 発行

東北大学高度教養教育・学生支援機構

〒980-8576 仙台市青葉区川内 41 TEL 022-795-7551

<http://www.ihe.tohoku.ac.jp/>

*No.55 以前は CAHE TOHOKU Report として刊行



Institute for Excellence in Higher Education, Tohoku University

